

松江市文化財調査報告書 第175集

交通安全施設整備事業（市道大野上岡線視距改良工事）に伴う発掘調査報告書

上 岡 遺 跡

平成28(2016)年6月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

例　　言

1. 本書は、平成 26 年度から 27 年度に委託を受けた、交通安全施設整備事業（市道大野上岡線視距改良工事）に伴う上岡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松江市都市整備部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 上岡遺跡
(所在地) 島根県松江市岡本町 1280-5、1281-1、1282-6

4. 現地調査の期間

平成 27 年 2 月 12 日～平成 27 年 4 月 10 日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積：1700m²　　調査面積：171.1m²

6. 調査組織

依頼者　松江市都市整備部土木課

主体者　松江市教育委員会　教 育 長 清水 伸夫

【平成 26 年度】　現地調査

事務局　松江市歴史まちづくり部　部長 安田 憲司

　　〃 文化財統括官（埋蔵文化財調査室長兼務）　錦織 慶樹

　　〃 まちづくり文化財課　課長 永島 真吾

　　〃 〃 埋蔵文化財調査室　調査係 係長 赤澤 秀則

　　〃 〃 〃 〃 専門企画員 宮道 元

　　〃 〃 〃 〃 主任 川西 学

実施者　公益財団法人松江市スポーツ振興財団　理 事 長 清水 伸夫

　　埋蔵文化財課　課長 三島 秀幸

　　〃 調査係 係長 古藤 博昭

　　〃 〃 調査員 廣濱 貴子（担当者）

　　〃 〃 調査補助員 原 英誉

【平成 27 年度】　現地調査

事務局　松江市歴史まちづくり部　部長 安田 憲司

　　〃 まちづくり文化財課　課長 永島 真吾

　　〃 〃 専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務）　飯塚 康行

　　〃 〃 埋蔵文化財調査室　調査係 係長 赤澤 秀則

　　〃 〃 〃 〃 主任 徳永 隆

　　〃 〃 〃 〃 嘴託 門脇 誠也

調査指導者 島根県教育庁 文化財課 主幹 深田 浩
実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理事長 清水 伸夫
埋蔵文化財課 課長 曽田 健
" 調査係 係長 川西 学
" " 調査員 廣濱 貴子(担当者)
" " 調査補助員 門脇 祐介

【平成28年度】 報告書作成業務

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 藤原 亮彦
" 次長 永島 真吾
" (まちづくり文化財課 課長兼務)
" まちづくり文化財課
" " 専門幹(埋蔵文化財調査室長兼務) 飯塚 康行
" " 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則
" " " " 主任 徳永 隆
" " " " 学芸員 三宅 和子
" " " " 書記 門脇 誠也
実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理事長 清水 伸夫
埋蔵文化財課 課長 曽田 健
" 調査係 係長 川西 学
" " 調査員 廣濱 貴子(担当者)
" " 調査補助員 門脇 祐介

7. 調査に携わった発掘作業員

井川洋、岩成博美、岩成敏章、内田義、岡崎雄二郎、加藤恵治、向村生人、深津靖博、
福田紘治、福田進、峰谷一雄、和田章

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・淨書、遺構の淨書は以下の者が行った。

須藤佳奈子

9. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教授、ご協力を頂いた。
記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

花谷浩(出雲市 市民文化部 文化財課 学芸調整官)

大谷晃二(島根県立松江北高等学校 教諭)

山根正明(元松江市文化財課史料編纂室)

10. 本書の執筆は第1章第1節を徳永隆(松江市埋蔵文化財調査室)が、第1章第2節～第4章を廣
濱が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て廣濱が行った。

11. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

[須恵器・土師器]

稻田陽介 2013 「第10章 出土遺物の様相 第2節 土器 1. 須恵器・土師器 3) 出雲國府跡出土土器の型式設定と実年代」『史跡出雲国府跡－9 総集編一』島根県教育委員会

12. 本書における須恵器、土師器の時期区分は以下のとおりである。

第1型式・・7世紀後葉

第2型式・・7世紀末葉から8世紀第1四半期

第3型式・・8世紀第2四半期

第4型式・・8世紀第3四半期から第4四半期

第5型式・・8世紀末葉から9世紀前葉

13. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。

14. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。

15. 本書における遺構の略号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物跡 SA：柱穴列 SK：土坑 SP：柱穴 SF：通路

16. 本書の遺構番号は、調査時に設定したものを報告書作成にあたり振り直した。遺構名の新旧について、表6（遺構一覧表）に掲載している。

17. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

18. 島根県・松江市の地図を下図に示した。



島根県・松江市位置図

目 次

例言

第 1 章 調査の経過.....	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 試掘調査.....	2
第 3 節 調査範囲.....	3
第 2 章 位置と歴史的環境.....	4
第 1 節 地理的環境.....	4
第 2 節 歴史的環境.....	4
第 3 章 調査の方法と成果.....	7
第 1 節 調査の方法.....	7
第 2 節 調査の概要と基本層序.....	7
第 1 項 調査の概要.....	7
第 2 項 基本層序	8
第 3 節 遺構と遺物.....	9
第 1 項 掘立柱建物跡	9
第 2 項 柱穴列.....	13
第 3 項 土坑.....	15
第 4 項 通路.....	17
第 5 項 遺構外出土遺物.....	18
第 4 章 総括.....	21
第 1 節 遺構	21
第 2 節 遺物	22
第 3 節 結語	22
遺構一覧表	26
遺物観察表	28
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	開発範囲図	1
第 2 図	試掘調査成果図	2
第 3 図	試掘調査出土遺物実測図	2
第 4 図	調査範囲図	3
第 5 図	調査前地形測量図	3
第 6 図	周辺の遺跡分布図	6
第 7 図	調査区割り図	7
第 8 図	遺構全体図	8
第 9 図	調査区 A-A' 土層断面図	9
第 10 図	調査区 B-B' 土層断面図	9
第 11 図	SB01 実測図	10
第 12 図	SB01 出土遺物実測図	10
第 13 図	SB02 実測図	11
第 14 図	SB02 出土遺物実測図	11
第 15 図	SB03 実測図	11
第 16 図	SB04 実測図	12
第 17 図	SB04 出土遺物実測図	12
第 18 図	SB05 実測図	12
第 19 図	SB06 実測図	13
第 20 図	SB07 実測図	13
第 21 図	柱穴列実測図	14
第 22 図	SK01 実測図	16
第 23 図	SK01 出土遺物実測図	16
第 24 図	SK02 実測図	16
第 25 図	SK02 出土遺物実測図	16
第 26 図	SK03 実測図	17
第 27 図	SK03 出土遺物実測図	17
第 28 図	SF01 実測図	17
第 29 図	SF01 出土遺物実測図	17
第 30 図	遺構外出土遺物実測図①	19
第 31 図	遺構外出土遺物実測図②	20

挿表目次

表 1	出土土器組成表（破片数）	23
表 2	出土土器集計表（破片数） - 掲載遺物	24
表 3	出土土器集計表（破片数） - 非掲載遺物	25
表 4	掘立柱建物跡計測表	26
表 5	柱穴列計測表	26
表 6	遺構一覧表	26

写真図版目次

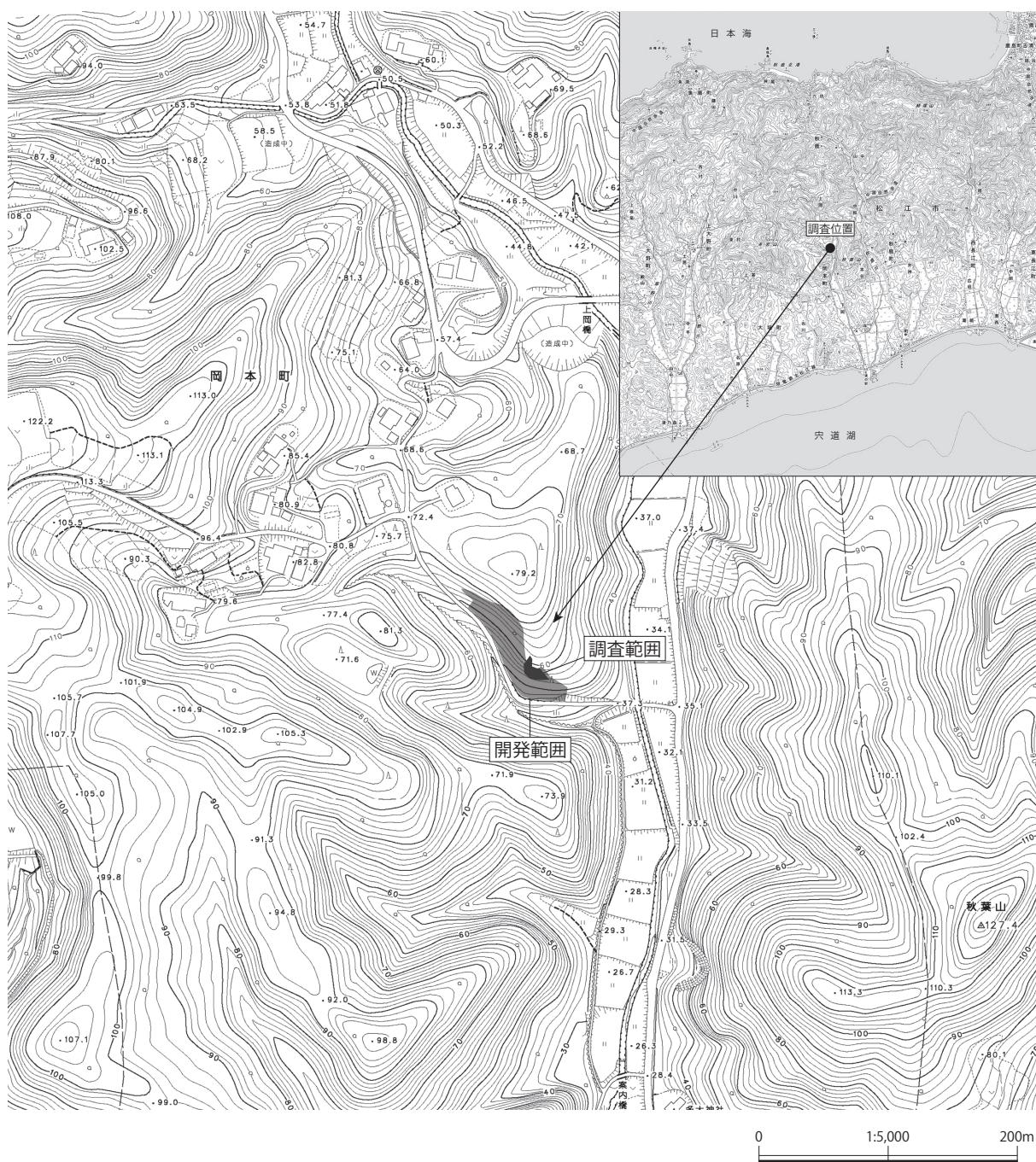
図版 1	調査前全景（南東から）、中央畦土層断面（北西から）
図版 2	完掘状況（南西から）、完掘状況（南東から）
図版 3	完掘状況（北西から）、SF01・SK02 完掘状況（南東から）
図版 4	SF01 土層断面（南から）、SK01 完掘状況（南から）、SK03 磁検出状況（南西から）
図版 5	SK03 完掘状況（南西から）、遺物出土状況（蓋）、遺物出土状況（高台付环）
図版 6	試掘調査出土遺物、SB01 出土遺物、SB02 出土遺物、SB04 出土遺物、SA01・02 出土遺物、SK01 出土遺物、SK02 出土遺物、SK03 出土遺物、SF01 出土遺物
図版 7	遺構外出土遺物①
図版 8	遺構外出土遺物②

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯(第1図)

市道大野上岡線は、谷沿いを抜けて丘陵上にある集落に至る生活道路であるが、一部で幅員が狭小なうえに急角度で折れ曲がり見通しが悪く、恒常に事故の危険性が高い区域が存在していた。このため、平成26年度に松江市により道路の視距改良工事が計画されることとなった。

この事業計画範囲において、平成26年5月に埋蔵文化財の有無照会が松江市教育委員会へなされた。これを受け、松江市まちづくり文化財課において当該事業範囲の分布調査を行ったところ、開削



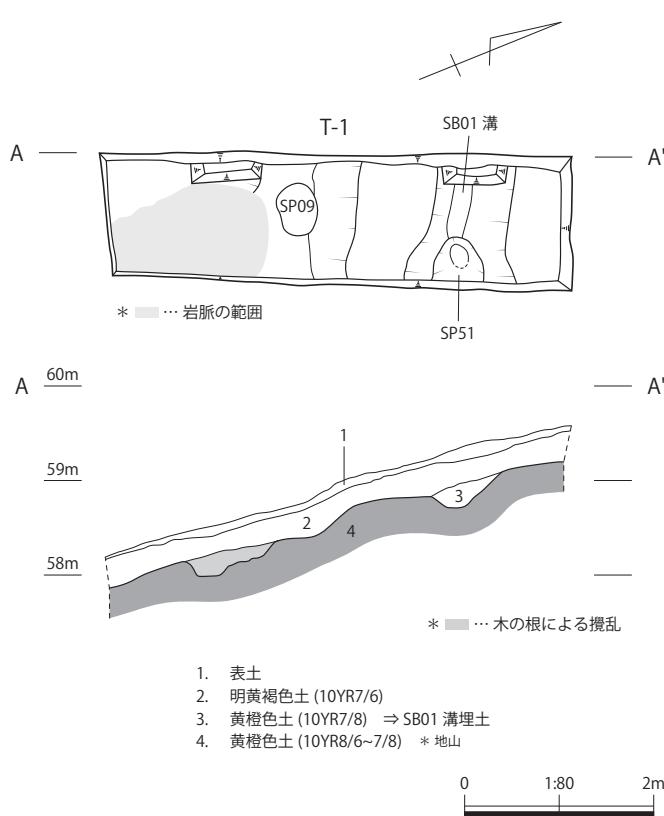
第1図 開発範囲図 (S=1:5,000)

予定の尾根部に緩斜面が確認され、当該範囲における遺跡の有無を判断するため、同年6月に試掘調査を実施した。この結果、土坑等の遺構や遺物が検出されたことから、この緩斜面部に遺跡が存在することが確認されたため、平成26年6月に遺跡の発見通知が提出され、「上岡遺跡」として周知されることとなった。なお、当該尾根の頂部については、周知の遺跡として「上岡城跡」が存在していたが、周囲の地形や当該試掘調査の結果からはこれに伴うと思われる遺構や遺物は確認されなかったことから、城跡とは異なる性格の遺跡と判断し、別個の名称を付している。

以上のとおり、事業予定地内に遺跡が発見されたため、事業者と協議を行ったが、事業計画の変更は困難であるとの判断に至り、平成27年1月には松江市から発掘通知が提出された。このことについて県教育委員会と協議した結果、遺跡にかかる事業範囲について発掘調査の勧告を受けることとなり、これにより、平成27年2月から当該遺跡の本発掘調査を実施するに至ったものである。

第2節 試掘調査（第2・3・4図）

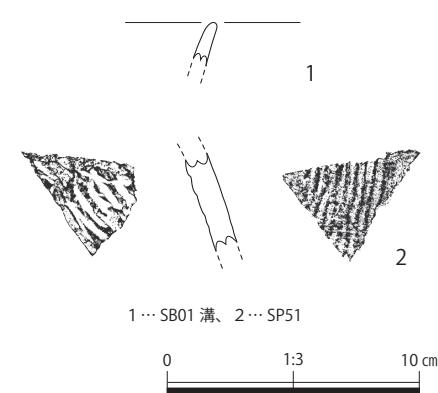
松江市教育委員会により、市道大野上岡線視距改良工事に伴う試掘調査が行われた。開発範囲の丘陵緩斜面に5×1.5mのトレンチを設定し調査を行った結果、斜面に直交する向き、つまり等高線に沿う形で溝と加工段を検出した。また、トレンチの北側ではピットを検出し、覆土には炭化物が少量含まれていた。他に、トレンチの南側から角礫が多数検出され、石積み遺構と捉えた。しかし、この石積み遺構とした部分は、本調査時にサブトレンチを入れた結果、岩脈が露頭した部分であることが確認され、遺構ではないとの判断に至っている。



第2図 試掘調査成果図 (S=1:80)

遺物は、土層断面2層（明黄褐色土）から須恵器が出土している。第3図-1は壺の口縁部である。2は甕片である。

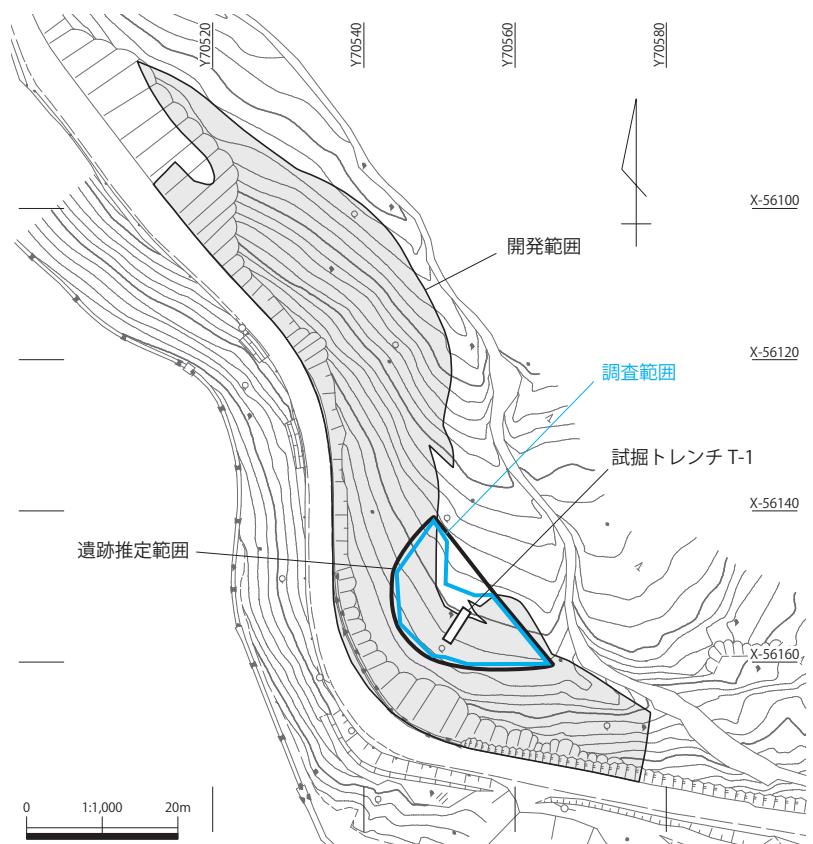
試掘調査地の北側尾根上は遺跡地図で上岡城跡とされているが、城跡とする遺構は確認されず⁽¹⁾、試掘調査でも山城に伴う遺構や遺物は認められなかつた。



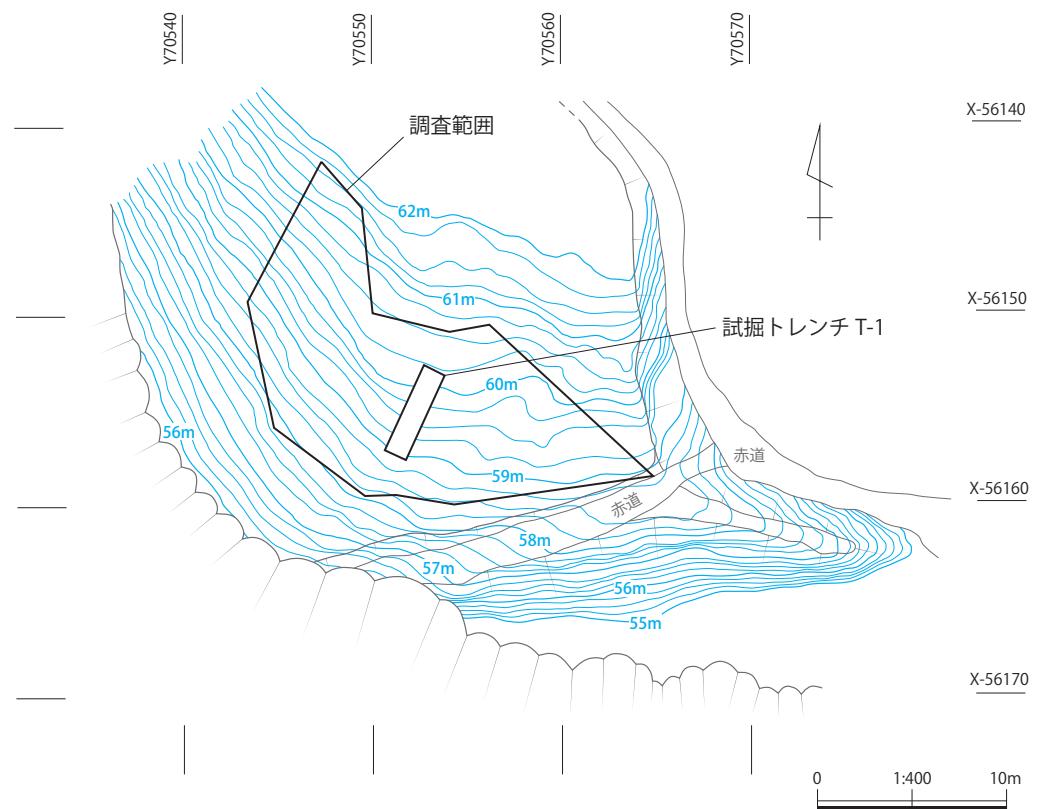
第3図 試掘調査出土遺物実測図 (S=1:3)

第3節 調査範囲（第4・5図）

試掘調査結果から遺跡の範囲は、開発範囲の内緩斜面を呈する 240m²と判断した。前述したように、本遺跡は低丘陵の南西側斜面に位置している。斜面下側には、3m 程の法面を隔てて市道が北西側から南東側へ向かって通っている。調査範囲については松江市教育委員会と協議を行い、市道側斜面下側について安全面を考慮し 3～4m の緩衝地帯を設けている。これにより、調査面積は 171.1 m²となつた。



第4図 調査範囲図 (S=1:1,000)



第5図 調査前地形測量図 (S=1:400)

第2章 位置と歴史的環境

第1節 地理的環境（島根県・松江市位置図、第6図）

上岡遺跡は、松江市岡本町に所在し、岡本町は松江市北西部、島根半島の中央部に位置する。島根半島の山系からは、南側の宍道湖へ向けて尾根筋がいくつも派生しており、本遺跡はその尾根筋の丘陵上に所在している。標高は 57.75m～61.75m を測り、宍道湖からは約 1.9km 北側にあたる。遺跡の東側から南側には細長い谷が宍道湖に向かって延び、岡本川が流れている。その流域には田畠が開け、集落が形成されている。

第2節 歴史的環境（第6図）

縄文時代 当該期の遺跡は少ないが、本遺跡から東側の西長江町に所在する廻り遺跡（31）から縄文時代後期前葉頃の竪穴建物跡が検出され、同時期の土器が出土している。また、後谷遺跡（37）では縄文土器が採集されている。

弥生時代 当該期の遺跡としては佃遺跡（7）、新宮遺跡（14）、石の堂遺跡（15）、廻り遺跡が挙げられる。これらの遺跡からは、弥生時代中期や後期、終末期の土器が出土しているが、確認されている遺構は少なく、廻り遺跡で土坑や柱穴を検出している程度である。

古墳時代 遺跡数は前代に比べて増加する。本遺跡周辺の低丘陵には多くの古墳が確認されているが、発掘調査された遺跡は限られ、既知の遺跡の大部分は分布調査によるものが多い状況にある。

宍道湖北岸域では、古墳時代前期末から中期初頭に比較的大型の古墳が築造される。大垣大塚古墳群（39）は、10基からなる古墳群で、なかでも1号墳は出雲地域最大の円墳であり、直径 54m、高さ 9m を測る。古墳の表面に葺石を配し、方形透孔をもつ円筒埴輪の破片が表採されており、古墳時代前期末に位置付けられている。また、墳裾から埴輪棺が出土している。2号墳は、1号墳の東隣に位置し、一辺 36m × 33m、高さ 5.5m を測る方墳である。主体部が確認され、埋葬施設に排水溝が伴うことが判明している。大垣大塚古墳群は、1号墳以外明確な時期が判明していないが、1号墳と大きく外れない時期に古墳群が形成されている。山崎古墳（27）は前方後円墳であり、未発掘であるが、前方部幅と後円部径の比率から中期の古墳の可能性が指摘されている。平廻古墳（44）は、全長 44m の前方後方墳であるが、構築時期は不明である。このような大型の古墳がみられる一方で、規模が 10～15m の小規模な古墳が確認される。丸山荒神古墳（40）や高下古墳（41）、重里古墳（38）は、いずれも一辺 10～15m の方墳である。また、池窪山古墳（42）や鍛冶屋谷古墳群（43）、石曳古墳（10）では横穴式石室が確認され、出土遺物から後期の古墳と考えられている。本遺跡南東側には、横木古墳群（8）や三栗屋奥古墳群（9）、桑地谷古墳（11）などがみられるが、時期は不明である。

横穴では、25穴の横穴を確認した祝谷横穴群（4）があり、土師器、須恵器、鉄器が出土している。他に、佃遺跡で古墳時代前期から中期の土師器が、宮ノ前遺跡（5）で古墳時代中期後葉の須恵器や砥石が出土している。井神谷西遺跡（22）、井神谷東遺跡（23）からも須恵器片や砥石が出土して

いるが、詳細な時期は不明である。また、昨年度調査が行われた広垣遺跡（26）では、古墳時代中期から後期の土器や木製品が多く出土し、建物跡は検出されていないが周辺に同時期の集落の存在が窺われている。

古代（奈良時代・平安時代） 奈良時代に編纂された『出雲国風土記』では、当地域は秋鹿郡にあたる。秋鹿郷は、現在の佐陀川西岸から大野町まで一帯にあたり、四つの郷（恵曇郷・多太郷・大野郷・伊農郷）からなり、郡家推定地は東長江町とされている。当地域は、その郷のなかの多太郷に属し、南東側には『出雲国風土記』にみえる「多太社」、現在の多太神社が存在している。

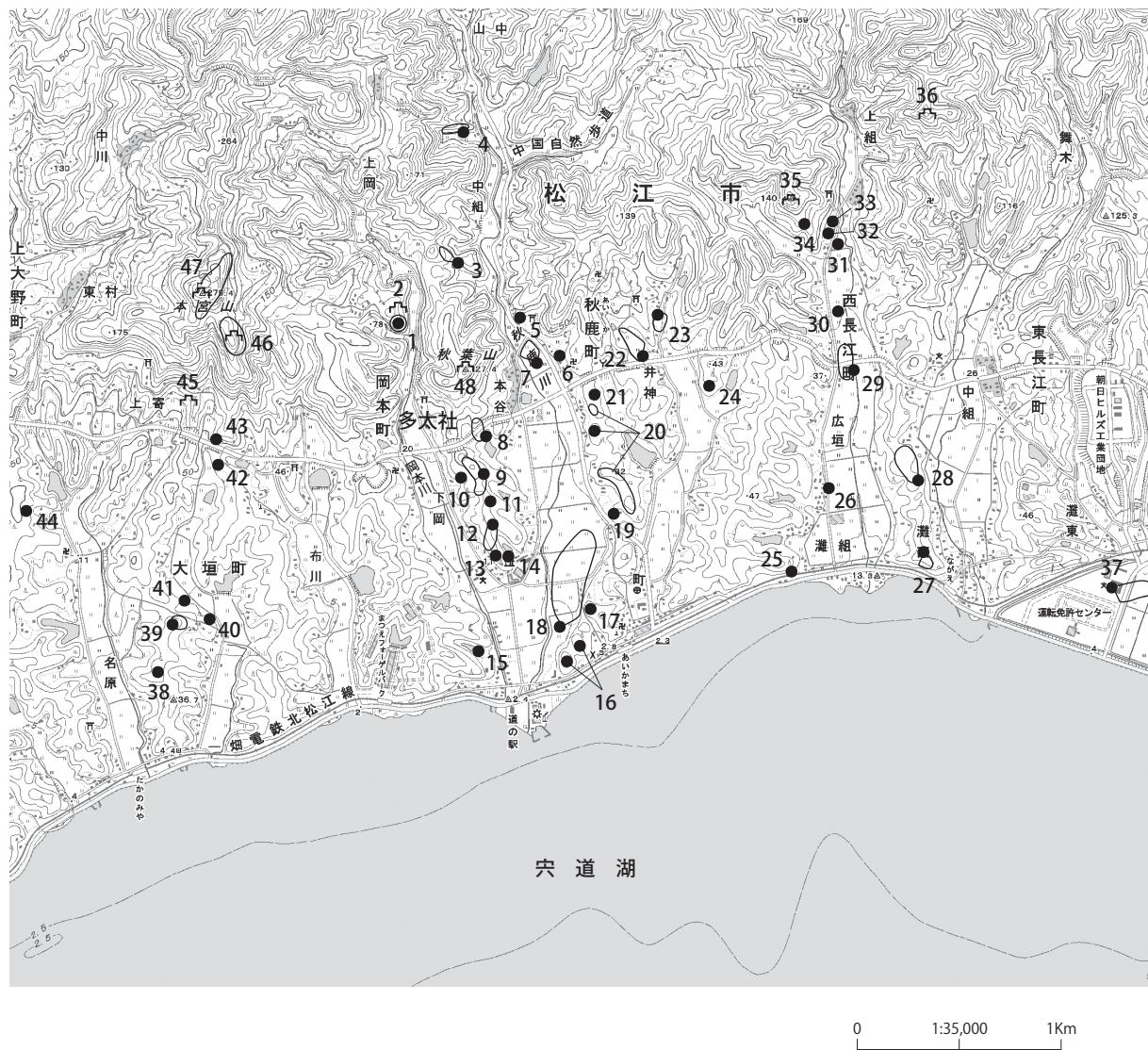
奈良時代には谷部の水田に条里制が敷かれ、その痕跡を示す遺跡として、西長江町の西長江地区条里制遺跡（29）や、秋鹿町の秋鹿川流域条里制遺跡（18）が確認されている。

他に、広垣遺跡から平安時代の墨書き土器が出土し、当該期の居館の存在が想定されている。また、石の堂遺跡、新宮遺跡では、奈良時代から平安時代の須恵器や土師器が出土している。

中世 中世に入ると、出雲国一円に尼子と毛利の戦乱が広がり、当地域周辺にも多くの山城が築かれ、本遺跡の北西側尾根上には上岡城跡（2）がみられる。また、上岡城跡の西側には標高279.4mの大野氏の居城であった本宮山城跡（47）がある。大野氏は、尼子・毛利氏による一連の戦乱の中でやがて宍道氏の管轄下に置かれていった。また、大野氏の支族である大垣氏は、本宮山南東側の丘陵上に亀畠山城跡（46）を構えている。大垣氏は亀畠山の南西側に居宅を設けており、これが大垣氏館跡（45）である。大野氏と大垣氏は天正10（1582）年、宍道氏に攻められ滅亡している。他に、雜賀氏が居城した二つ山城跡（36）や、大廻三郎左衛門正次の居城である鶴尾山城跡（48）がみられる。

【参考文献】

- 岡崎雄二郎 1985 「古い歴史の跡」『郷土誌ふるさと秋鹿』 秋鹿郷土誌刊行委員会
- 島根県教育庁文化財課古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 「大垣大塚古墳群（附論 スクモ塚古墳）」『島根県古代文化センター調査研究報告 40』
- 平井聖 1980 『日本城郭大系 14 鳥取・島根・山口』 新人物往来社
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2009 『石の堂遺跡発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2009 『新宮遺跡発掘調査報告書』



- | | | |
|-------------|----------------|--------------|
| 1. 上岡遺跡 | 17. 後山古墳 | 33. 塚さん古墳 |
| 2. 上岡城跡 | 18. 秋鹿川流域条里制遺跡 | 34. 下垣古墳 |
| 3. 結込古墳群 | 19. 亀割坂古墳 | 35. 西長江要害山城跡 |
| 4. 祝谷横穴群 | 20. 回田古墳群 | 36. 二つ山城跡 |
| 5. 宮ノ前遺跡 | 21. 出雲郷古墓群 | 37. 後谷遺跡 |
| 6. 寺の前古墓群 | 22. 井神谷西遺跡 | 38. 重里古墳 |
| 7. 佃遺跡 | 23. 井神谷東遺跡 | 39. 大垣大塚古墳群 |
| 8. 横木古墳群 | 24. 松ノ前遺跡 | 40. 丸山荒神古墳 |
| 9. 三栗屋奥古墳群 | 25. 常楽寺瓦窯跡 | 41. 高下古墳 |
| 10. 石曳古墳 | 26. 広垣遺跡 | 42. 池窪山古墳 |
| 11. 桑地谷古墳 | 27. 山崎古墳 | 43. 鍛冶屋谷古墳群 |
| 12. 崎山古墳群 | 28. 東長江古墳群 | 44. 平廻古墳 |
| 13. 狐松古墳 | 29. 西長江地区条里制遺跡 | 45. 大垣氏館跡 |
| 14. 新宮遺跡 | 30. 岩屋古墳 | 46. 亀畠山城跡 |
| 15. 石の堂遺跡 | 31. 回り遺跡 | 47. 本宮山城跡 |
| 16. 岡本友田古墳群 | 32. 下垣井戸の上古墳 | 48. 鰐尾山城跡 |

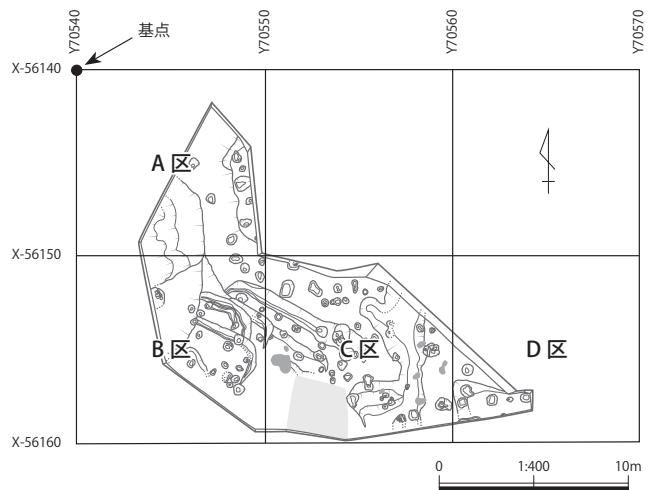
第6図 周辺の遺跡分布図 (S=1:35,000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法（第7図）

調査の方法は、調査区を国土座標に当てはめ、X=-56140 と Y=70540 の交点を基点とし、10m 毎のメッシュを東側と南側に組んでいった。その結果、調査区はそのなかの 4 区画に当てはまることとなり、基点の東側の区画を A 区、その南側を B 区、B 区の東側を C 区、D 区として 10m グリッドの調査区とした。最初に、試掘トレーニチに沿うように中央畦を設定し土層観察を行い、次に遺物包含層の掘削、遺構面の検出、遺構の掘削等を行った。

測量はトータルステーションを用い、その図化測量図と遺構を照合しながら平面図をおこし、レベルを記入した。方位については、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層断面はレベルを用いて手作業で測量を行い、土色の注記は新版標準土色帖を使用した。また、写真はフィルムカメラによる 35mm のモノクロ、35mm リバーサル、デジタル一眼レフカメラを主に使用し、120mm スライドフィルムカメラを援用して撮影した。



第7図 調査区割り図 (S=1:400)

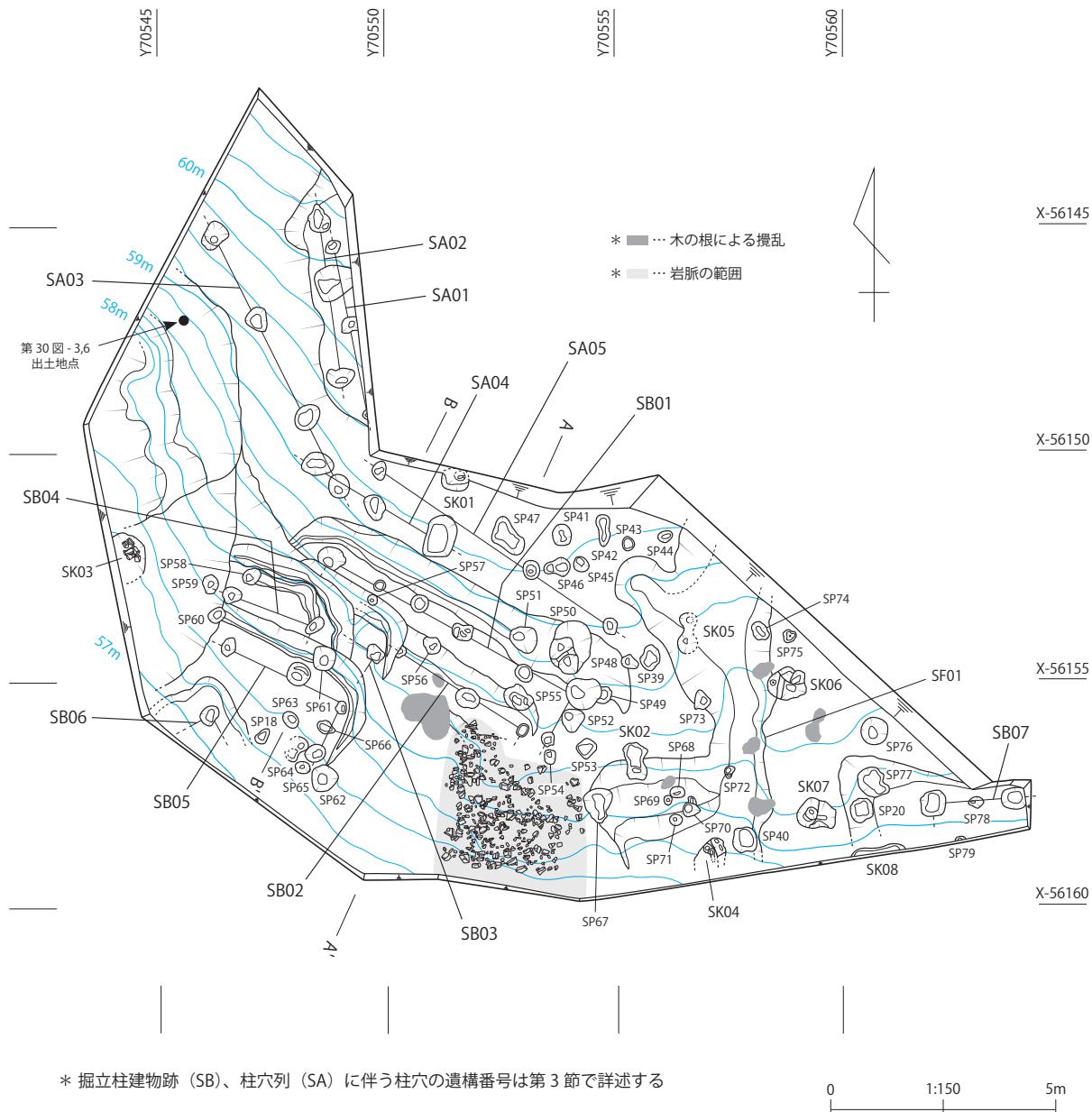
第2節 調査の概要と基本層序

第1項 調査の概要（第8図）

調査区は、南西側斜面に位置し、現地表面標高は 57.75 ~ 61.75m を測る。斜面は北西側ではやや急であり、南東側に向かって緩斜面となっている。調査区の南側と、南東側から北側にかけては赤道あかみちが通る。

最初に中央畦土層断面の観察を行い、表土や調査区全体に堆積していた土層（明黄褐色土）の掘削を行った。これらの土層からは、7世紀末から9世紀前葉の須恵器や土師器が出土している。調査の結果、斜面から加工段と柱穴、溝を検出し、掘立柱建物跡 7棟（SB01 ~ 07）を確認した。掘立柱建物跡のなかには切り合い関係が認められ、狭い範囲に順次加工段を造り、建物を建てた状況がみられた。他に、柱穴列（SA01 ~ 05）や土坑（SK01 ~ 08）、通路（SF01）を検出している。

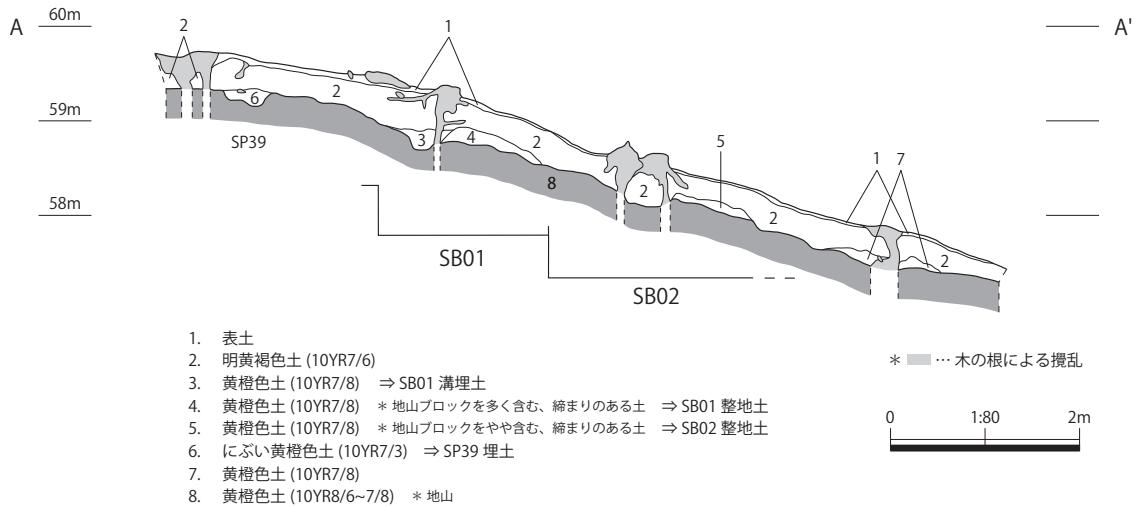
調査区中央の C 区南西側には、地山の岩脈が露頭したところがあり、ここから遺構は検出していない。また、調査区南西側では地山面が落ち込み、斜面が急であることから地山が流失したものと推測された。



第8図 遺構全体図 (S=1:150)

第2項 基本層序 (A-A') (第9図)

A-A' は、調査区中央付近に設定した土層断面である。調査地は北東から南西に向かって傾斜する斜面である。遺構は地山面から検出し、遺構面までの土層は表土と2層（明黄褐色土）である。2層は調査区全体に 10～40cm の厚さで堆積し、7世紀後葉から9世紀前葉の土器が出土している。3層は SB01 の溝の埋土、4層は地山ブロックを含む締まりのある土層で、SB01 の溝はこの土層上面より掘られていることから SB01 の整地土と思われる。5層も4層と同じような締まりのある土層で、SB02 の整地土と考えられた。6層は SP39 の埋土、7層は地山ブロックを含む軟らかい土層で、地山土層が軟化したものと思われる。地山は、黄橙色のブロックを含む土層である。



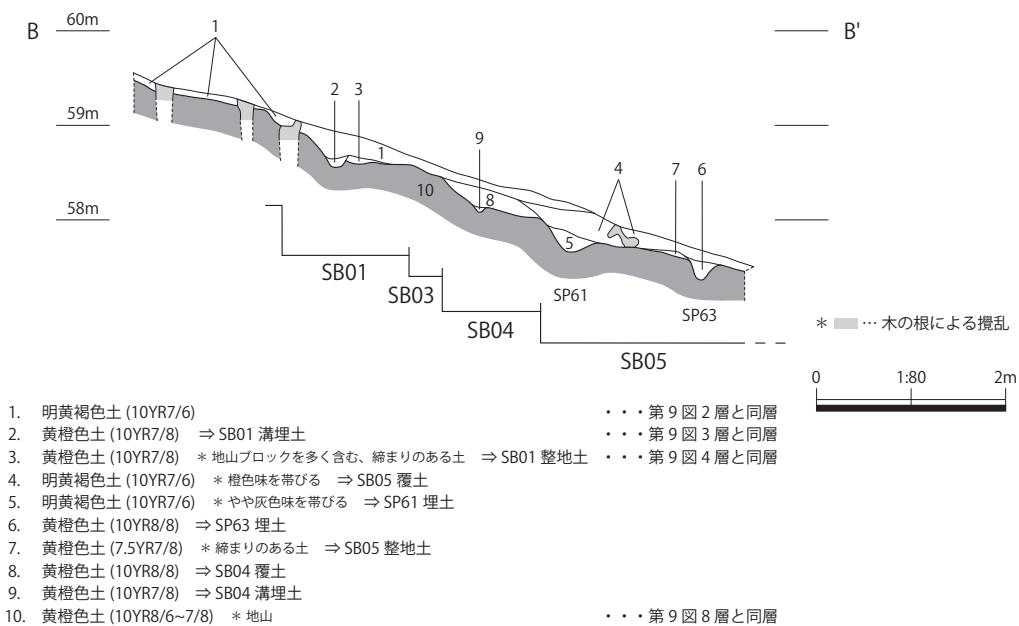
第9図 調査区A-A' 土層断面図 (S=1:80)

第3節 遺構と遺物

第1項 掘立柱建物跡（第10図）

掘立柱建物跡7棟を検出し、検出状況や土層断面から新旧関係を確認した。7棟のうち6棟(SB01～06)はB、C区から、1棟(SB07)はD区から検出している。出土遺物は少なく、建物跡の詳細な時期については不明なものもあるが、調査区全体に堆積していた明黄褐色土(第9図2層)の一番新しい遺物が9世紀前葉であることから、それより古いものと考えられる。

B-B'は、A-A'土層断面より西側で、加工段の状況を確認するために設定したトレンチの土層断面である。A-A'2層(明黄褐色土)の掘削途中で設定したものである。B-B'1層はA-A'2層と、2層はA-A'3層と、3層はA-A'4層と、10層はA-A'8層と同層である。4層はSB05の覆土、5層はSP61の埋土、6層はSP63の埋土である。SP63は7層上面より掘られていることから、7層はSB05の整地土と考



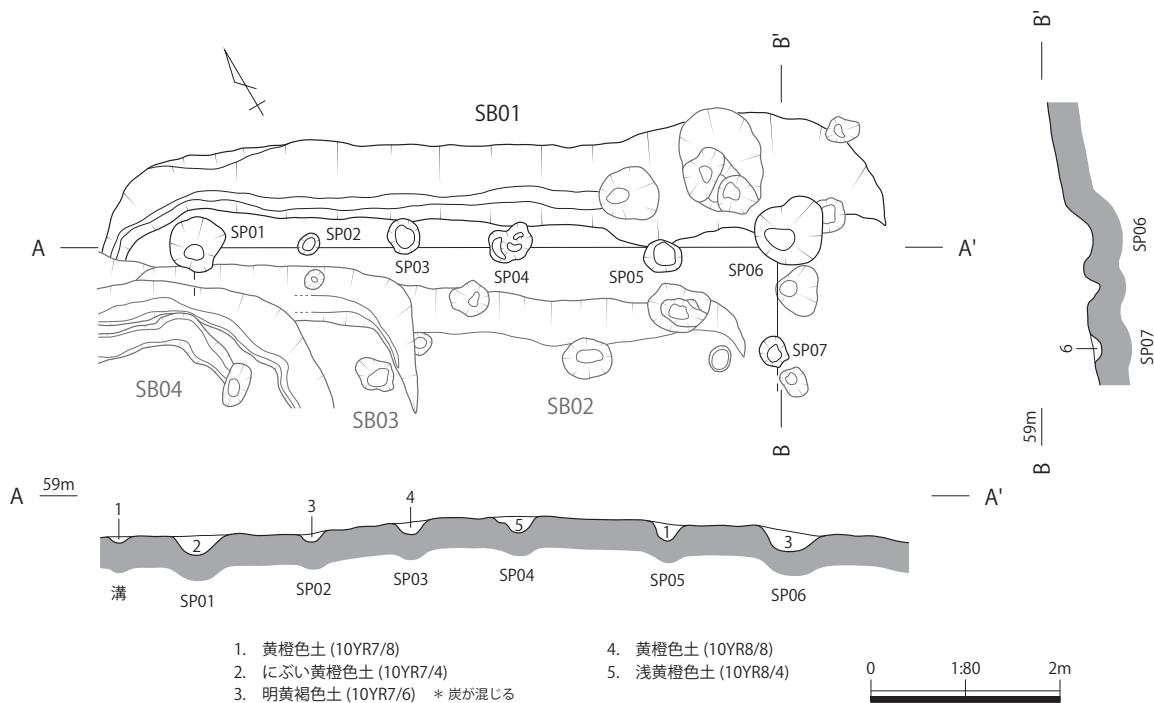
第10図 調査区B-B' 土層断面図 (S=1:80)

えられる。8層はSB04の覆土、9層はSB04の溝の埋土である。4層が8層を切っており、SB05が新、SB04が古である新旧関係がみられる。

A-A'、B-B'の土層断面から、斜面を段状に加工し、建物を構築している様子がわかる。また、全ての建物ではないが、斜面下方に盛土をし、床面を整地していることが確認された。

1. SB01（第11・12図）

SB01はB～C区のほぼ中央に位置し、検出した建物跡のなかで最高所にあたる。桁行5間(6.25m)、梁間1間以上の建物跡である。地山をL字状にカットして加工段を造り、斜面下方に黄橙色土（第9図4層）を盛って整地し、床面を造っている。主軸方向はN-61°-W、床面標高は58.8mを測る。床面は後述するSB02とSB03に切られ、SB02、03より古であると考えられる。柱穴（SP01～07）は円形もしくは不整円形で、上端径は24～77cm、深さは11～33cmを測る。柱間は、桁行方向でSP01-02が1.2m、SP02-03が1.0m、SP03-04が1.15m、SP04-05が1.6m、SP05-06が1.3m、梁



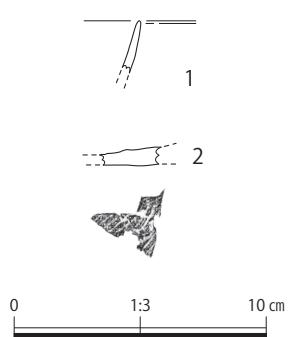
第11図 SB01 実測図 (S=1:80)

間方向でSP06-07が1.2mを測る。加工段の下側には浅い溝があり、この溝は建物跡の南東側では確認できなかった。

遺物は、SP06から須恵器の口縁部が、床面直上から無高台壺の底部が出土している。第12図-1は壺または長頸壺の口縁部である。器壁は薄く、体部が直線的に立ち上がる。2は壺の底部で、回転糸切り痕が認められる。回転糸切りが出現する出雲

国府第3型式（以下、第○型式と記載する）以降と思われる。 第12図 SB01 出土遺物実測図 (S=1:3)

出土遺物から、SB01は8世紀第2四半期頃に埋没したものと考えられる。

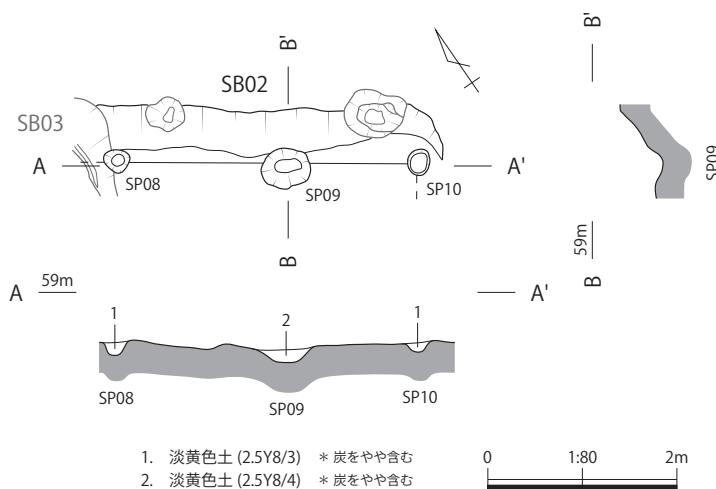


2. SB02 (第13・14図)

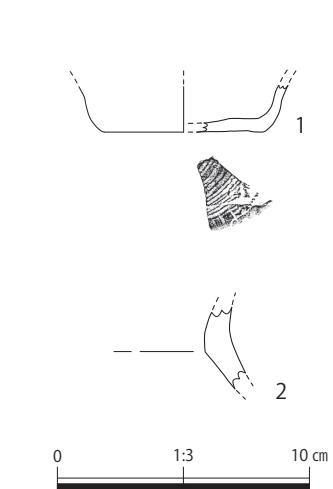
SB01の斜面下方、南西側に位置する。SB01の床面を掘り込んで加工段を造り、斜面下方に黄橙色土(第9図5層)を盛って整地し、床面を造っている。建物の北西側はSB03で切られ、SB01より新、SB03より古であると考えられる。建物の桁行2間分(3.2m)の柱穴(SP08～10)を検出している。主軸方向はN-58°-Wで、柱間はSP08-09が1.8m、SP09-10が1.4mを測る。柱穴は楕円形で、上端径は26～58cm、深さ7～17cmである。

遺物は、床面直上から須恵器の灯明皿型土器と土師器の甕が出土している。第14図-1は灯明皿型土器で、器壁は薄く、底部から口縁にかけて外反するものと思われる。底部には回転糸切り痕がみられる。8世紀末から9世紀初頭のものと考えられる。⁽²⁾2は甕の頸部で、調整は磨滅のため不明である。

SB02は、灯明皿型土器の年代より、8世紀末から9世紀初頭頃に埋没したものと考えられる。



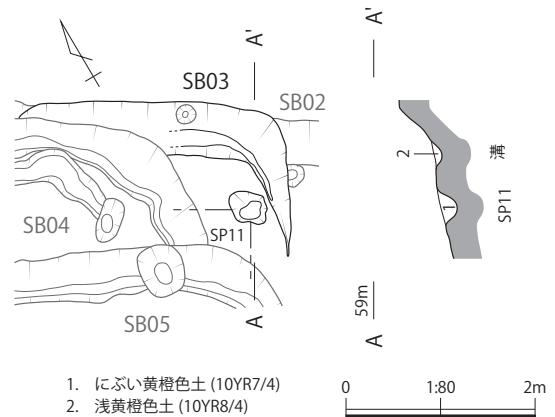
第13図 SB02 実測図 (S=1:80)



第14図 SB02出土遺物実測図 (S=1:3)

3. SB03 (第15図)

SB02の北西側で検出した建物跡である。建物の大半はSB04構築時に壊されており、溝と柱穴1個(SP11)のみを検出している。柱穴は上端径が45cm、深さ20cmを測る。検出状況からSB01、02より新、SB04より古である。床面標高は58.4mを測る。SB03から遺物は出土していない。



第15図 SB03 実測図 (S=1:80)

4. SB04 (第16・17図)

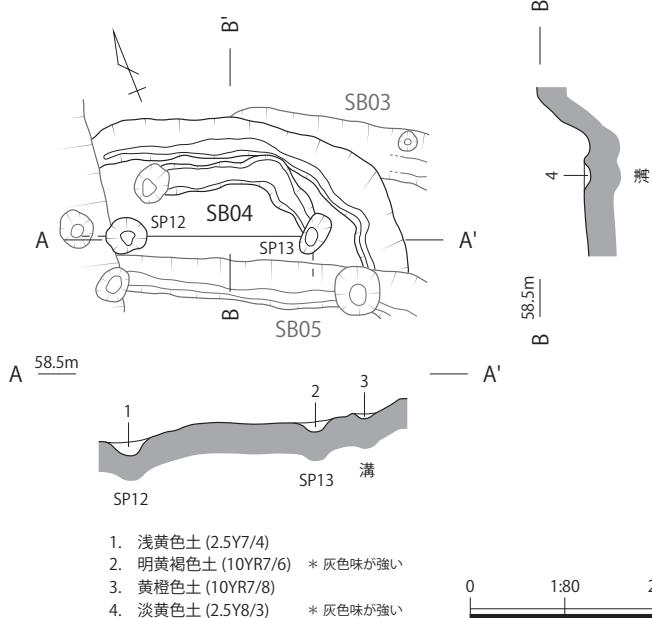
SB03の西側に位置する。検出状況や土層断面からSB03より新、SB05より古である新旧関係を確認した。建物跡に伴う溝2本と桁行1間分の柱穴(SP12・13)を検出したが、北西側は流失しているため当初の規模は不明である。柱穴は円形もしくは不整楕円形で、上端径は43～47cm、深さ13～18cmを測る。主軸方向はN-68°-W、柱間は1.9mである。床面標高は58.1mを測る。溝は加工段壁面下側から浅くて細い溝を1本、また、その

溝の内側からやや幅広の深い溝を1本検出している。前者は壁際を廻るが、後者は一部のみである。溝が2本あることから建て替えの可能性も考えられるが、幅広の溝に伴う柱穴を確認していないことから判然としない。

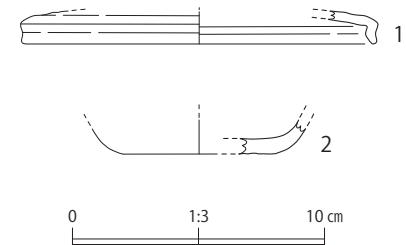
遺物は、床面直上と溝の埋土から須恵器が出土している。第17図-1は口縁端部が直立し、輪状つまみが付く蓋で、第2型式と思われる。2は溝埋土から出土した無高台壺の底部である。形状より第

3から第5型式頃の可能性が考えられる。

SB04の遺物は7世紀末から9世紀前葉であるが、SB02より新であり、SB02が8世紀末から9世紀前葉であることを考えると、同時期またはそれより新しいと考えられる。



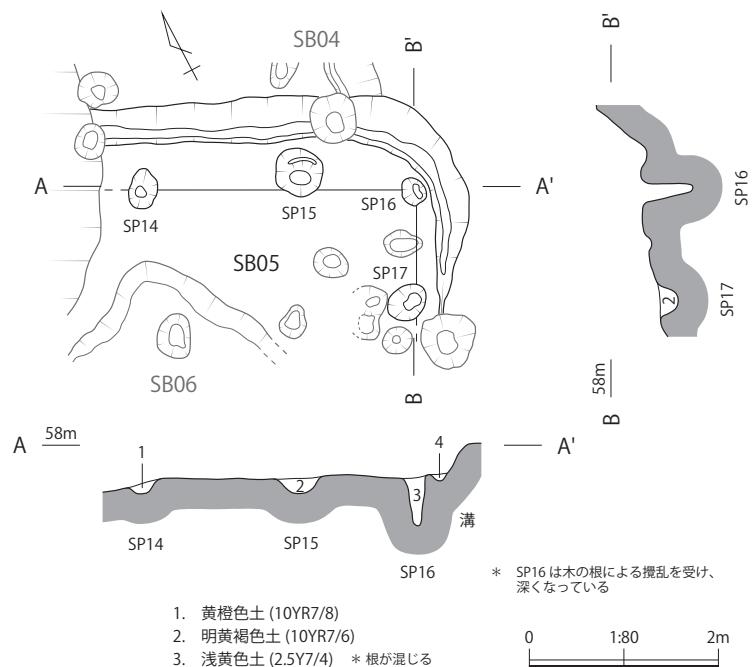
第16図 SB04 実測図 (S=1:80)



第17図 SB04 出土遺物実測図 (S=1:3)

5. SB05 (第18図)

SB05は、SB04の南側に位置する。桁行2間分(2.9m)、梁間1間分(1.15m)を検出したが、建物跡の北西側は流失しており、当初の規模は不明である。柱穴は不整梢円形で、上端径は29~50cm、深さ15~53cmを測る。SP16は、柱穴埋土に後から根が入り込んだことによって他の柱穴よりも深くなっている。柱間は、桁行方向でSP14-15が1.7m、SP15-16が1.2m、梁間方向でSP16-17が1.15mを測り、主軸方向はN-62°-Wである。床面には僅かに整地土が確認され、床面標高は最も高いところで57.7mである。



第18図 SB05 実測図 (S=1:80)

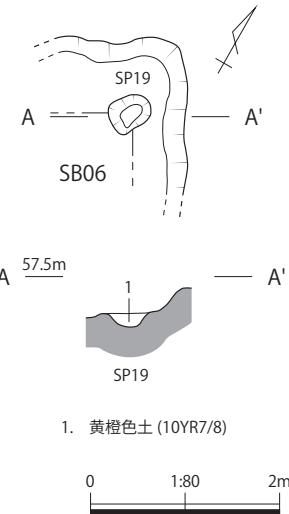
加工段壁面下側には浅い溝が廻っていた。

SB05 から遺物は出土していないため時期の詳細は不明だが、先述したように SB04 の覆土を切って構築しており、SB04 が古、SB05 が新であるという新旧関係にある。

6. SB06 (第19図)

SB06 は、SB05 の南西側、斜面下方で検出した建物跡で、調査区外へ続いている。加工段と柱穴 1 個 (SP19) を検出したのみで、当初の規模は不明である。柱穴の主軸方向はわからないが、加工段の方向をみると、SB01 ~ 05 より主軸が北側に振れているように思われる。

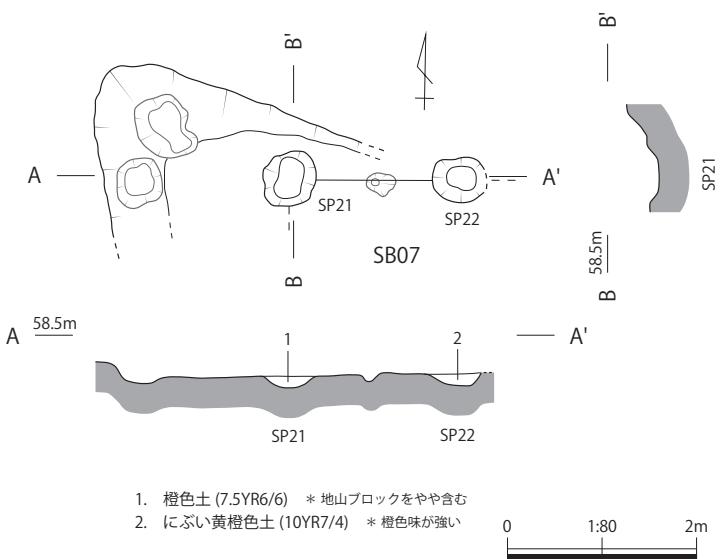
SB06 から遺物は出土していないが、検出状況から SB05 の床面の一部を掘り込んで造られており、SB05 より新しいと思われる。



7. SB07 (第20図)

SB07 は、調査区南東端で検出した建物跡である。桁行 1 間分 (1.8m) の柱穴 2 個 (SP21・22) を検出し、東側調査区外へ続いている。柱間は 1.8m、主軸方向は N - 87° - E、床面標高は 58.1m を測る。柱穴は不整楕円形で、上端径は 56 ~ 60cm、深さ 11 ~ 19cm を測る。覆土にはやや橙色味をおびた明黄褐色土が堆積していた。

SB07 から遺物は出土していないため時期は不明だが、明黄褐色土（第9図2層）の遺物の一番新しい時期が9世紀前葉であり、それより古いと考えられる。

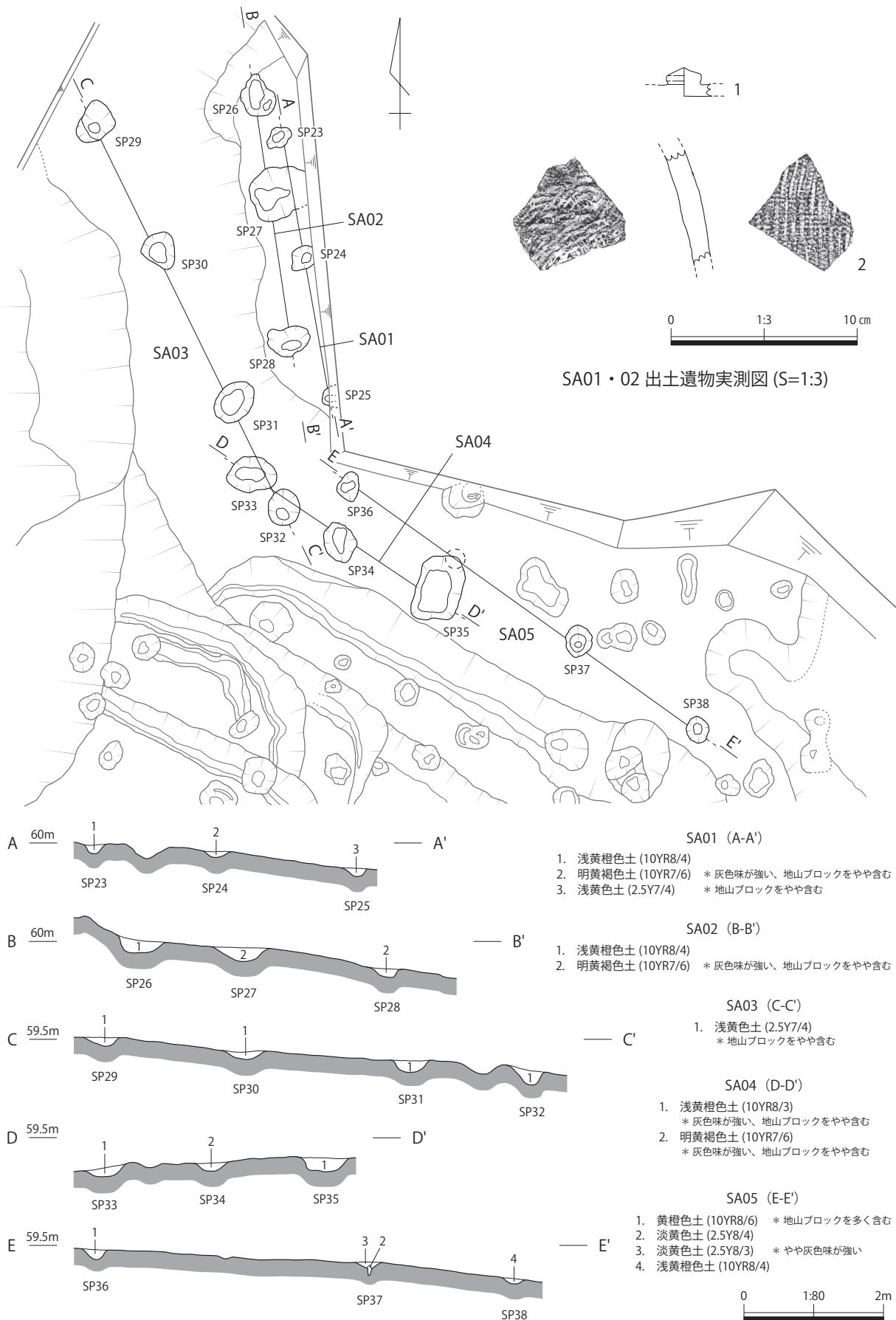


第20図 SB07 実測図 (S=1:80)

第2項 柱穴列 (第21図)

柱穴列は、A 区と B、C 区の北側、斜面上方で 5 本確認している。これらの柱穴列は、建物の桁行部分に相当する可能性も考えられるが、加工段を伴わないことや梁間方向の柱穴を確認していないことから、建物跡として確定できなかった柱穴列とした。

柱穴列からは、8世紀第2四半期から9世紀前葉の遺物が出土している。また、第9図2層、明黄褐色土の遺物は7世紀末から9世紀前葉であり、それ以降の時期のものは出土していない。これらの遺物の時期から、柱穴列は古代の可能性が高く、城跡に伴うものとは考えにくい。



1. SA01・02（第21図）

SA01、02はA区調査区境、東壁際で検出した。柱穴列の北側はやや凹み、灰色味の強い明黄褐色土が堆積していた。この落ち込みを加工段と考えてもよいのかもしれないが、現況では判然としない。

SA01は、3個の柱穴（SP23～25）がN-20°-Wの方向に直線的に並んでおり、その長さは3.8mである。柱穴の上端径は27～40cm、深さ8～17cmを測り、柱間はSP23-24が1.8m、SP24-25が2.0mである。

SA02も3個の柱穴（SP26～28）からなり、N-17°-Wの方向に直線的に並んでいる。柱穴の上端径は60～80cm、深さ23～30cmを測る。SP27は根による搅乱を受け、径が大きくなっている。柱間は、SP26-27が1.5m、SP27-28が2.1mである。

このSA01、02は位置的に造り替えが行われたものと考えられる。SA01、02の柱穴から遺物は出土していないが、覆土から須恵器の宝珠つまみと甕片が出土している。第21図-1は宝珠つまみである。蓋の一部と思われるが、全体の形がわからないことから、宝珠つまみが出現する第3型式以降と考えられる。2は甕片で、外面にタタキ痕、内面に同心円状の当て具痕がみられる。

2. SA03（第21図）

SA03は、SA01、02の西側、斜面下方で検出している。4個の柱穴（SP29～32）がN-26°-Wの方向に直線的に並んでおり、その長さは6.2mを測る。柱穴の上端径は52～64cm、深さ24～37cm、柱間はSP29-30が2.1m、SP30-31が2.4m、SP31-32が1.7mである。SA03の南東側はSA04と重複し、切り合い関係にあったと思われるが、遺構検出の際に切り合いは確認できなかった。遺物は、SP31から須恵器の甕の細片が出土している。

3. SA04（第21図）

SA04は、SA03の南東側に位置し、3個の柱穴（SP33～35）からなる。N-57°-Wの方向に直線的に並び、その長さは3.2mである。平面はSP33、34が橢円形、SP35が方形を呈し、上端径58～97cm、深さ24～32cmを測る。柱間は1.6mである。SA04から遺物は出土していない。

4. SA05（第21図）

SA05は、SA04、SB01の北東側に位置する。3個の柱穴（SP36～38）を検出し、その長さは6.2m、方向はN-56°-Wである。柱穴は橢円形で、上端径は36～44cm、深さ11～20cmを測る。柱間は、SP36-37が4.1m、SP37-38が2.1mである。SP36-37間は広く、この間に1個柱穴が存在した可能性も考えられる。SA05から遺物は出土していない。

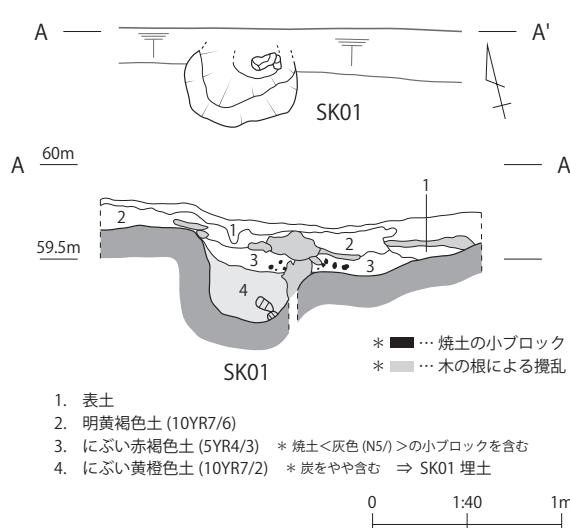
第3項 土坑

検出した土坑は8基（SK01～08）あり、C区で多く確認している。土坑のなかには、浅いものや一部根による搅乱を受けたと思われるものもある。遺物が出土したものは少なく、本報告では遺物を

伴う3基について詳述し、それ以外の土坑の規模については表6（遺構一覧表）を参照して頂きたい。

1. SK01 (第22・23図)

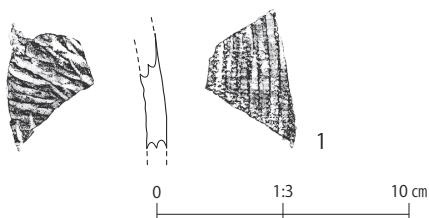
C区、調査区北壁際で検出した土坑で、調査区外へ続いている。現況で規模は、東西60cm、南北39cm、深さ26cmを測る。A-A'はSK01の北側、調査区壁面の土層断面である。SK01の埋土は炭をやや含むにぶい黄橙色土（土層断面4層）であり、4層上面には焼土をブロック状に含む3層（にぶい赤褐色土）が堆積している。土坑内や周辺に焼けたようなところは確認されなかったが、火を使用した痕跡である。2層は、第9図2層の明黄褐色土と同層であり、2層が堆積する以前に火を使用したと思われる。今回の調査のなかで、唯一火を使用したことを示す痕跡である。



第22図 SK01 実測図 (S=1:40)

遺物は、4層から須恵器の甕片が出土しているだけで、時期を判断できる遺物は出土していない。しかし、明黄褐色土出土遺物の一番新しい時期である9世紀前葉より古いと推測される。

第23図-1は甕片である。外面に平行叩き痕、内面に当て具痕がみられる。



第23図 SK01 出土遺物実測図 (S=1:3)

2. SK02 (第24・25図)

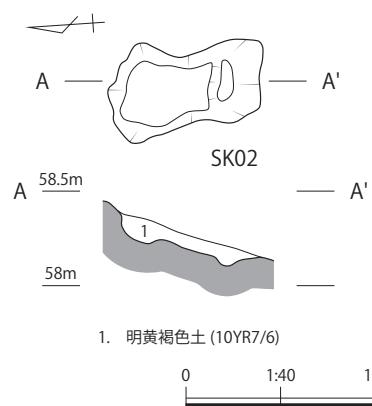
SB01の南東側で検出した土坑である。平面は不整長方形で、長径81cm、短径53cm、深さ34cmを測る。遺構内には明黄褐色土が堆積し、須恵器の壺が出土している。

第25図-1は壺の体部下半で、高台が付くものか無高台かは判然としない。内外面に回転ナデが施されている。

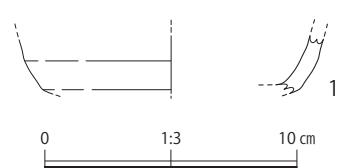
3. SK03 (第26・27図)

SK03はB区西壁際で検出した土坑で、調査区外へ続いている。現況で規模は、南北1.03m、東西55cm、深さ25cmを測る。埋土は浅黄橙色土で、埋土内から10～20cm程度の大きさの礫が出土している。

遺物は、埋土から須恵器の壺と甕片が出土している。第27図-1は口縁がハの字状に開く壺で、第5型式頃のものと思われる。



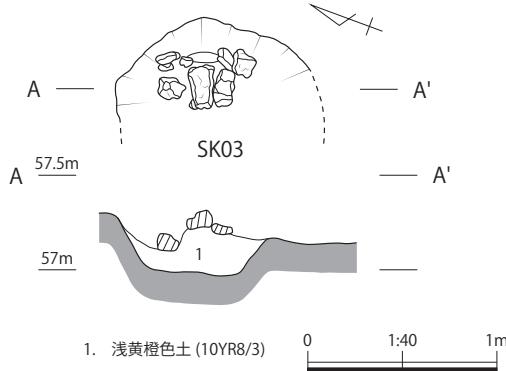
第24図 SK02 実測図 (S=1:40)



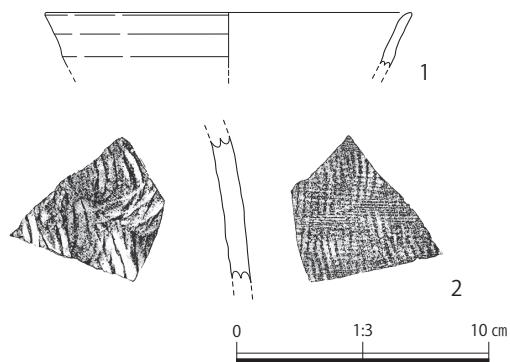
第25図 SK02 出土遺物実測図 (S=1:3)

れる。2は須恵器の甕片である。

SK03の埋没年代は8世紀末から9世紀前半頃と考えられるが、性格は不明である。



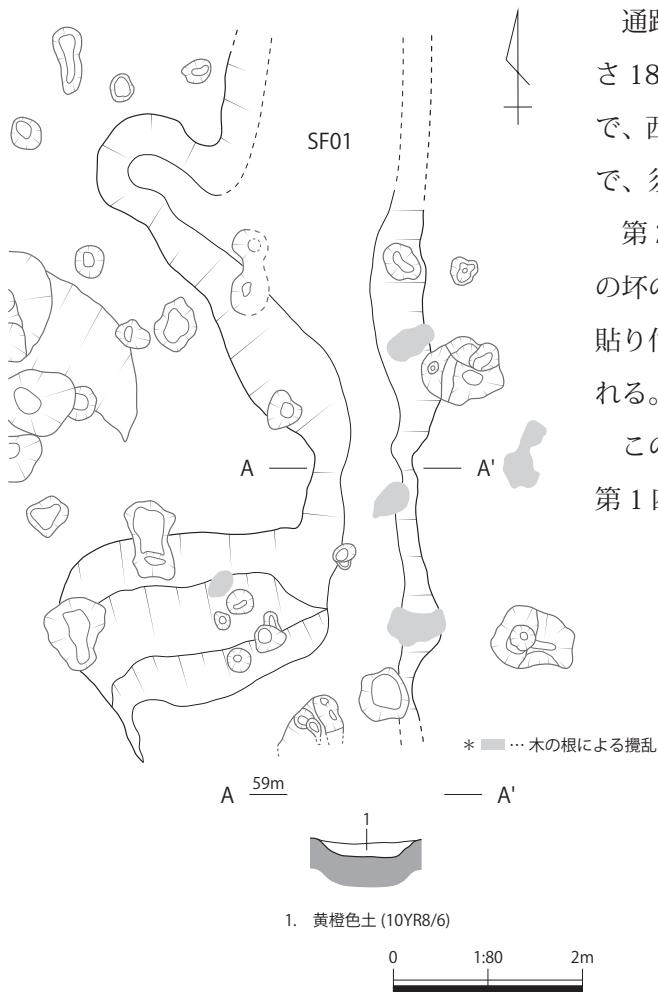
第26図 SK03 実測図 (S=1:40)



第27図 SK03 出土遺物実測図 (S=1:3)

第4項 通路 (第28・29図)

C区東側で検出した遺構で、南北方向に延び、調査区外の斜面上方と下方へ続いている。遺構の西側にはSB01～06、柱穴列が、東側にはSB07があり、その位置関係から、本報告では建物と建物の間を南北方向に通る通路と捉えた。しかし、今後検討を要する遺構である。

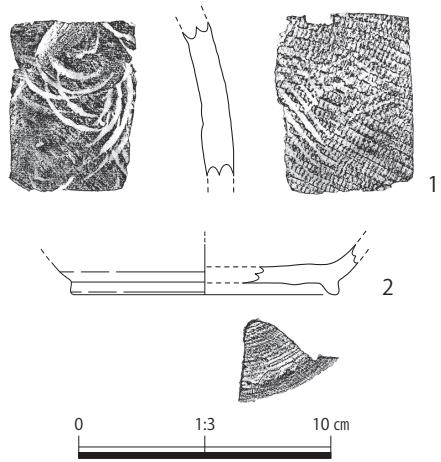


第28図 SF01 実測図 (S=1:80)

通路は現況で、長さ7.8m、幅1.0～4.0m、深さ18～25cm程度を測る。平面は、東側は直線的で、西側は不整形を呈している。覆土は黄橙色土で、須恵器の甕片や土師器の壊が出土している。

第29図-1は須恵器の甕片である。2は土師器の壊の底部である。高台は低く、底部外縁近くに貼り付けたもので、外面に回転糸切り痕が確認される。第2型式頃と思われる。

この通路は、出土遺物より7世紀末から8世紀第1四半期以降に埋没したと考えられる。



第29図 SF01 出土遺物実測図 (S=1:3)

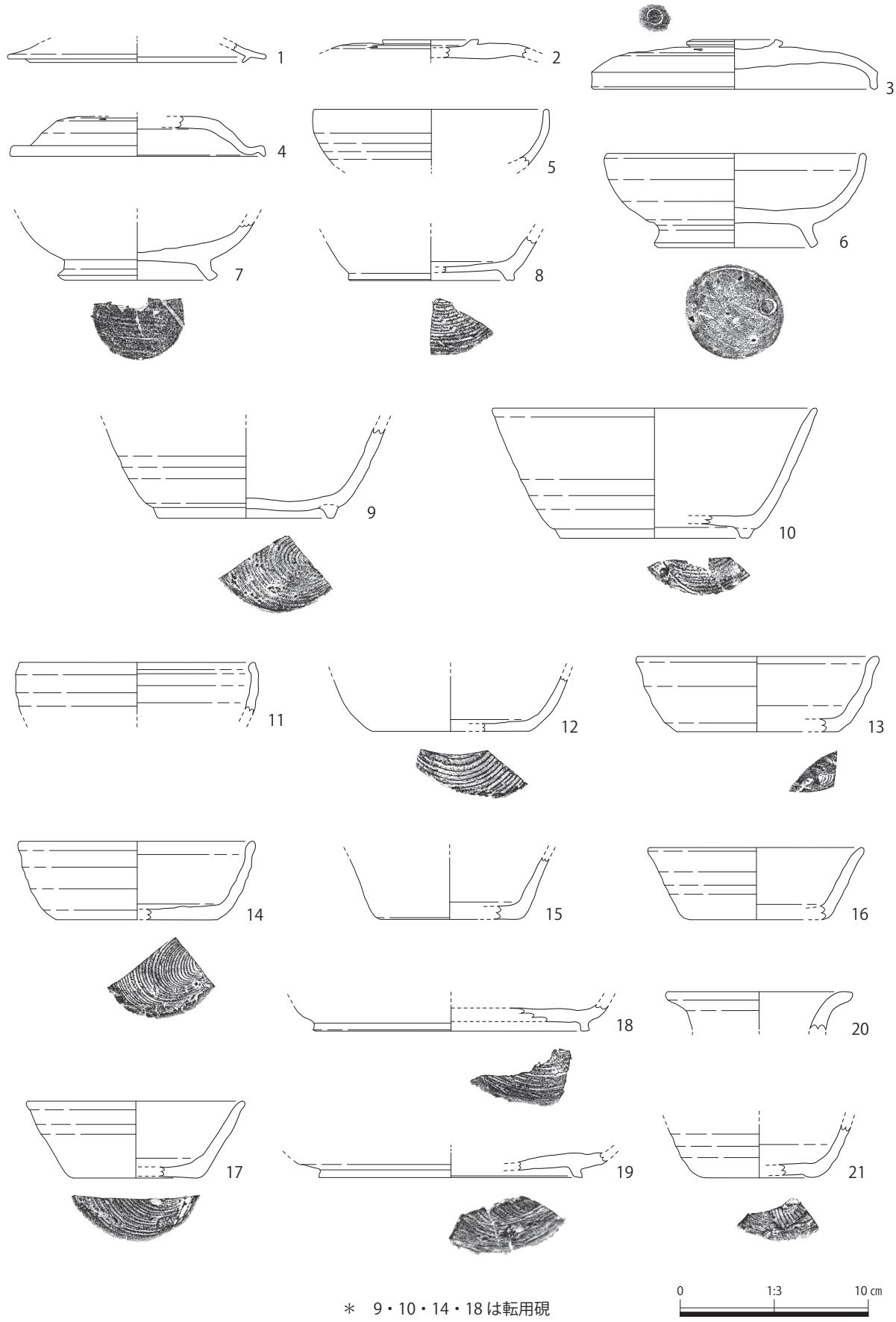
第5項 遺構外出土遺物（第30・31図）

遺物は総点数465点が出土しており、ここでは表土や明黄褐色土（第9図2層）から出土した遺物を取り扱う。この遺構外遺物の総数は420点であり、遺物の大半を占めるのは須恵器で367点、土師器は須恵器の7分の1程度の53点という内訳になっている。

第30図-1～4は蓋である。1は口縁端部にかえりがつくもので、口径11.4cmを測る。第1型式のものである。2、3は輪状つまみの蓋である。3は口径15.3cmを測り、口縁端部が直立する。天井部に直径8mmの○印が施されている。4は口縁がS字状を呈し、端部が短く屈曲する。口径13.4cm、残存高2.1cmを測り、第5型式と思われる。5は内湾する坏の口縁部で、高台が付くと思われる。6～10は高台付坏である。6は口径13.7cm、底径8.7cm、器高5.0cmを測る。坏体部は丸みをもち、高台がややハの字状に開く。底部外面には回転糸切り後ナデが施され、3の蓋と同様に直径8mmの○印が施されている。3と6はセット関係にあったものと考えられる。7は底部から坏体部下半である。底径7.6cmを測り、底部の形状は6と似ている。底部外面には静止糸切り痕がみられる。6、7は底部切り離しの回転糸切りと静止糸切りが併存する時期、第2型式と思われる。8は坏体部が直線的に立ち上がり、高台が底部外縁に付くものと思われる。底径8.8cmを測り、回転糸切り痕がみられる。第5型式と思われる。9、10は底部外縁に低い高台が付き、坏体部が外傾しながら直線的に立ち上がる。9は底径9.2cmを測る。底部内面は滑らかで、転用硯と思われる。10は口径17.2cm、底径10.0cmを測り、回転糸切り後未調整である。底部は少ししか残存していないが、9と同様に内面が滑らかで、転用硯の可能性を考えられる。⁽³⁾9、10は坏体部から口縁にかけての外傾化が進んだもので、第5型式と思われる。11～17は無高台坏である。11は口径12.5cmの口縁部である。口縁端部の屈曲が弱く、湾曲も緩やかであることから、第3から第5型式と思われる。12は底径8.4cmを測り、外面に未調整の回転糸切り痕がみられる。坏体部がやや内湾しながら立ち上がり、第3から第5型式と思われる。13、14は第4から第5型式の坏と思われる。13は口径12.7cm、底径8.6cm、14は口径12.4cm、底径8.6cmを測る。14の底部内面は滑らかで、硯として使用されたと思われる。いずれも口縁端部に僅かな屈曲が認められ、坏体部は僅かに内湾し、底部外面は回転糸切り後未調整である。15～17は坏体部が直線的に立ち上がり外傾化が進んだ坏で、第5型式である。15は底径7.4cm、16は口径11.4cm、底径7.4cm、17は口径11.5cm、底径7.1cmである。18、19は高台付皿である。第4から第5型式と思われる。18は底径14.6cmを測る。高台は低く、外面に回転糸切り痕が認められる。内面は滑らかで、硯として転用されたと思われる。19も底部で、底径14.0cmを測る。20は平瓶の口縁部で、口径10.0cmを測る。第5型式と思われる。21は小形で体部が直線的に立ち上がり、坏の底部の可能性も考えられるが、小形壺の底部とした。底径6.0cmを測る。底部外面には工具による調整痕が認められる。

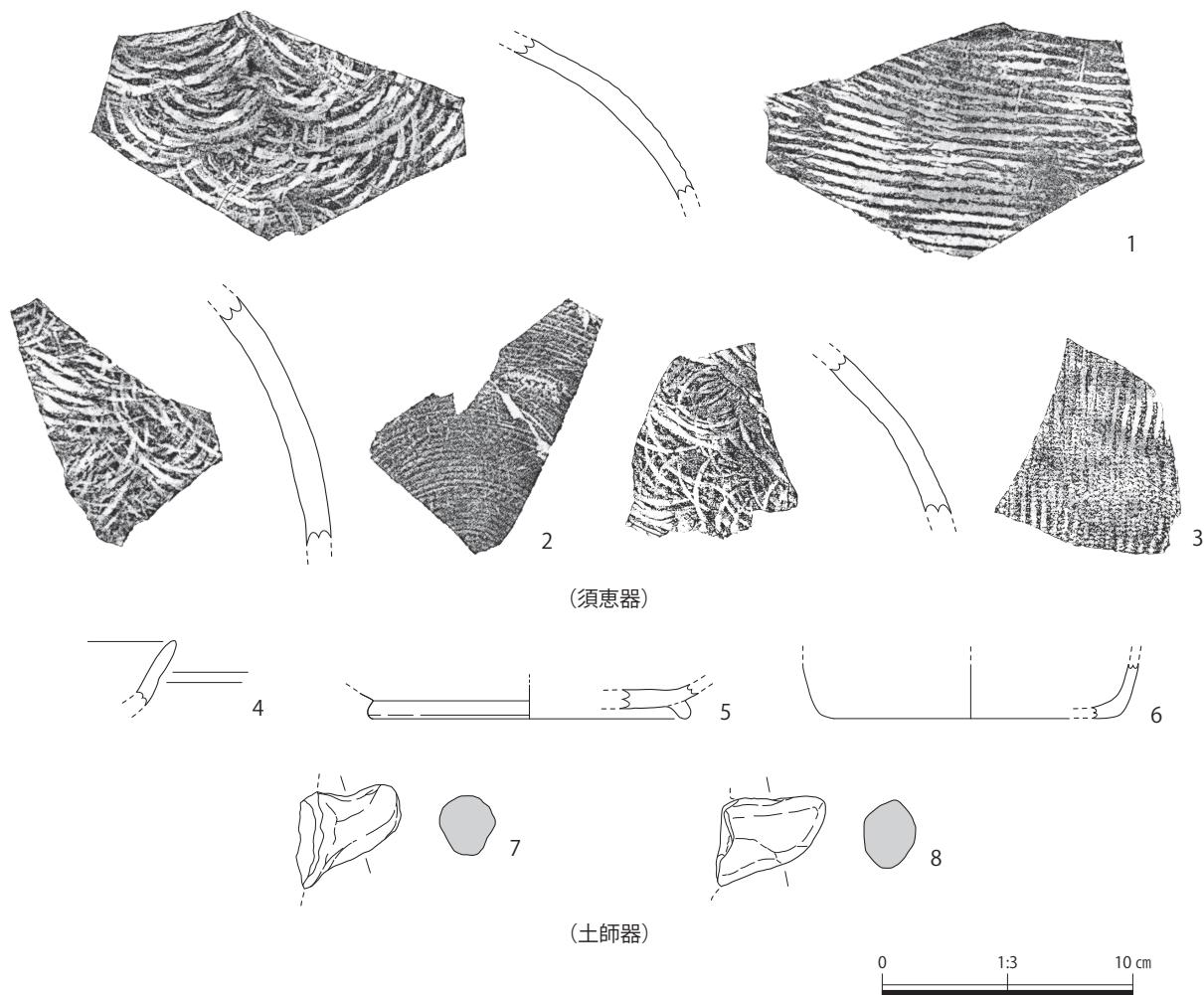
第31図-1、2は横瓶の胴部である。1の外面には横方向に平行タタキ痕が、内面には同心円のタタキ痕がみられる。2の外面には平行タタキの後力キ目が施されている。3は甕片である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円のタタキ痕がみられる。

4～8は土師器である。4は高台付皿の口縁部である。5は皿の底部で、底径は12.6cmである。底部外縁に低い高台が付き、第3から第5型式と思われる。6は無高台坏と思われる破片である。表面



第30図 遺構外出土遺物実測図① (S=1:3)

は風化が著しい。第3型式以降と思われるが判然としない。7、8は甌の把手である。



第31図 遺構外出土遺物実測図② (S=1:3)

第4章 総括

上岡遺跡発掘調査では、丘陵斜面において掘立柱建物跡、柱穴列、通路、土坑、柱穴を確認している。また、遺物は遺構内や覆土から須恵器、土師器が出土している。以下、遺構と遺物について記述し、まとめたい。

第1節 遺構

1. 掘立柱建物跡・柱穴列の様相

掘立柱建物跡は、調査区中央で6棟(SB01～06)を、南東端で1棟(SB07)を検出している。これらの建物跡の間には通路(SF01)が南北に通り、通路の両側に建物がみられるような状況である。

建物跡は、丘陵斜面を垂直に加工し、平坦面を造り出している。斜面下方側に盛土を行い、床面を整地した痕跡が残る建物跡もみられた。SB01～06は左右上下で新旧関係が確認され、概ね斜面上方から下方に向かって造られたことがわかる。また、建物跡のなかには床面の一部しか残存していないものがあり、大部分を重複して建て替えが行われている。建物の規模の全容はわからないが、検出した建物跡の桁行は1～5間、梁間は床面前半が流失しており、1間以上としか判断できない。現況で残存していた梁間の床面は1m程度であり、斜面の傾斜の具合から考えると、梁間2間以上の建物と推察される。

他に、今回の調査では柱穴列を5本確認している。柱穴列には重複しているものがあり、新旧関係があると考えられた。柱穴の上端径は様々で、深さは削平により浅いものが多くた。また、柱穴間は2m前後が多く、掘立柱建物よりやや幅広である。柱穴列の性格については、加工段を伴っていないことからすると柵のようなものと考えられるが、掘立柱建物の一部、桁行部分の可能性も捨てきれない。柵とした場合、柱穴列の北側(斜面上方)と南側(斜面下方)とを区別しなければならないような場所や建物が存在していた可能性があるが、現況からそれは判断できない。また、建物跡を考えると、SB01～06の北側や北西側にも建物跡が存在することとなり、調査区のほぼ全体に建物が構築されていたことになる。調査成果からすると、調査区範囲外にも建物跡が存在している可能性が考えられる。

2. 掘立柱建物跡・柱穴列の時期

掘立柱建物跡、柱穴列から出土した遺物は少なく、また破片であることから、大半が時期を限定できない。掘立柱建物跡の時期は、SB01が8世紀第2四半期、SB02、04が8世紀末から9世紀初頭と捉えている。検出状況や出土遺物よりSB01～06の新旧関係は、SB01(古)→SB02→SB03→SB04→SB05→SB06(新)である。SB02が8世紀末から9世紀初頭であることから、SB01は同時期またはそれ以前、SB02～06は覆土の一番新しい時期の遺物が9世紀前葉であることから、これより古いものと捉えられ、大幅に時期を経ずして建て替えが行われていたと考えられる。また、SB07の時期についても、覆土出土遺物の時期から9世紀前葉以前と考えられる。

柱穴列の時期について、SA01、02 の埋没時期は、出土遺物より 8世紀第2四半期から9世紀前葉頃と考えられる。他の柱穴列については覆土の下限である9世紀前葉頃と思われる。

掘立柱建物跡、柱穴列は、出土遺物より8世紀から9世紀前葉にかけて営まれ、廃絶したと考えられる。

第2節 遺物（表1・2・3）

今回出土した遺物は、須恵器と土師器である。その内訳は須恵器が約9割、土師器が1割である。

須恵器で一番多いのは甕片、次いで壺、蓋、皿といった順である。壺や皿は、8世紀から9世紀前葉のもので、中には内面が滑らかで転用硯と思われるものが6点確認された。転用硯は、第4型式から第5型式のものに多くみられ、8世紀第3四半期から9世紀前葉にかけて使用された可能性が高い。しかし、転用硯から墨を使用していたとは考えられるが、遺物のなかに墨書土器がみられない点では官衙施設の可能性は低いと思われる。

他に、8世紀末から9世紀初頭の灯明皿型土器が1点出土している。灯明皿型土器は、今までの調査で古代寺院や集落跡、仏教関係遺跡で確認されている。古代寺院である来美廃寺跡から出土した灯明皿型土器の内面にはタール状の付着物が認められ、灯明皿として使用されていたことがわかつている。また、高広遺跡⁽⁴⁾や林廻り遺跡⁽⁵⁾、古曾志平廻田遺跡⁽⁶⁾などの一般の集落跡で確認されているほか、堤平遺跡⁽⁷⁾のような仏教関係遺跡からも出土している。⁽⁸⁾このように灯明皿型土器は、性格の違う遺跡から出土していることが窺われる。本遺跡の場合、灯明皿型土器の他に転用硯も出土していることから、一般的な集落跡とは思われない。また、灯明皿型土器は、仏教に関わる器種である可能性が高いとの指摘⁽⁹⁾もあり、仏教関係遺跡の可能性が窺われる。

次に、点数の少ない土師器では、壺や皿、甕、瓶の把手が出土している。壺、甕などの煮炊き具や貯蔵具は少なく、またそれらの外面には炭化物の付着はみられない。また、遺構に伴う焼土面も確認されていないことから、この場所で煮炊きを行っていたようには考えられず、出土した甕は持ち運びのための容器として使用されていたのかもしれない。土師器の状況からも、一般的な集落跡とは思われず、須恵器からみた遺跡の性格を裏付けているように思われる。

遺物のなかには7世紀後葉の土器も含まれ、また、完形に近く、セット関係にある壺蓋があり、周辺に遺構の存在が窺われる。

第3節 結語

今回の調査では、狭小な緩斜面にも関わらず、掘立柱建物跡など多くの遺構が検出された。建物は、8世紀から9世紀前葉の間に同一地点に次々に建て替えられ、この場所に何らかのこだわりがあったようにも思われる。遺物をみても、煮炊きを行って日常生活を営むようなところではなく、一定時間内（昼間だけ）の居住地と推察される。⁽¹¹⁾また、転用硯や灯明皿型土器があることから、人々が生活を営む一般的な建物跡ではなく、特殊な用途の建物のように捉えられる。

天平5（733）年に完成した『出雲国風土記』には、本遺跡南東側にある「多太社」の名前がみえ、

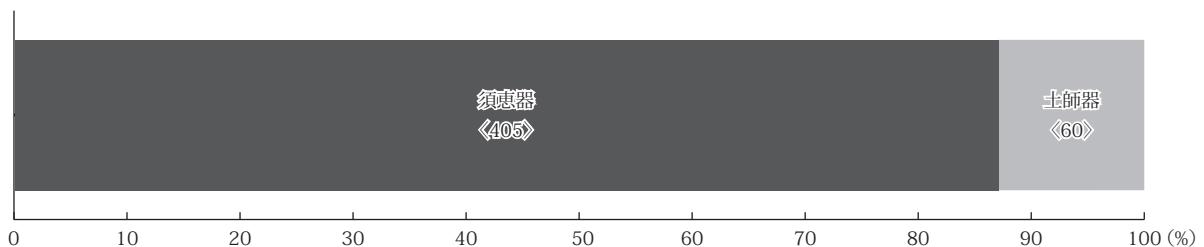
8世紀中頃には建立されていたことが窺われる。「多太社」と本遺跡の建物が同時期に存在していた可能性は高く、出土遺物のなかに転用硯や灯明皿型土器がある点からも仏教関係施設との関係性が窺われる。

覆土の遺物の多さからすれば、調査区外にも遺構が存在する可能性は高い。本調査区の北側、斜面上方には平坦面が確認されるため、本遺跡の本体は斜面北側にあり、遺物はそこから流れ込んだものと思われる。

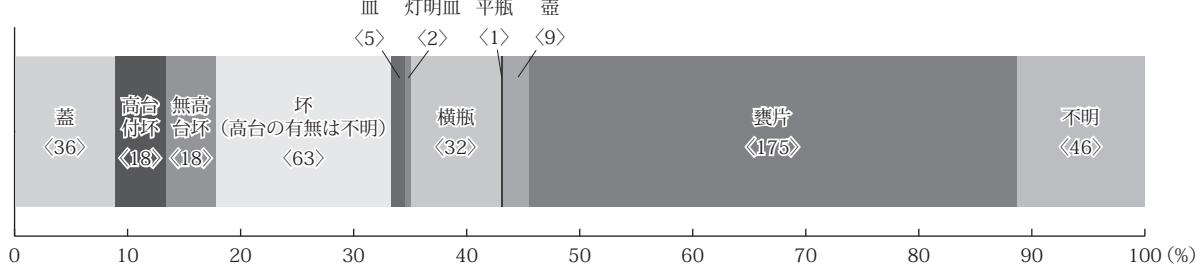
宍道湖北岸において、このような特殊な建物跡が確認されたことは、当地域における古代の様相を知るうえで有意義な資料となり得た。今後、資料の蓄積が進み、遺跡間での組成比較や数量比較を検討することによって、さらに様相が解明されることを期待したい。

表1 出土土器組成表（破片数）

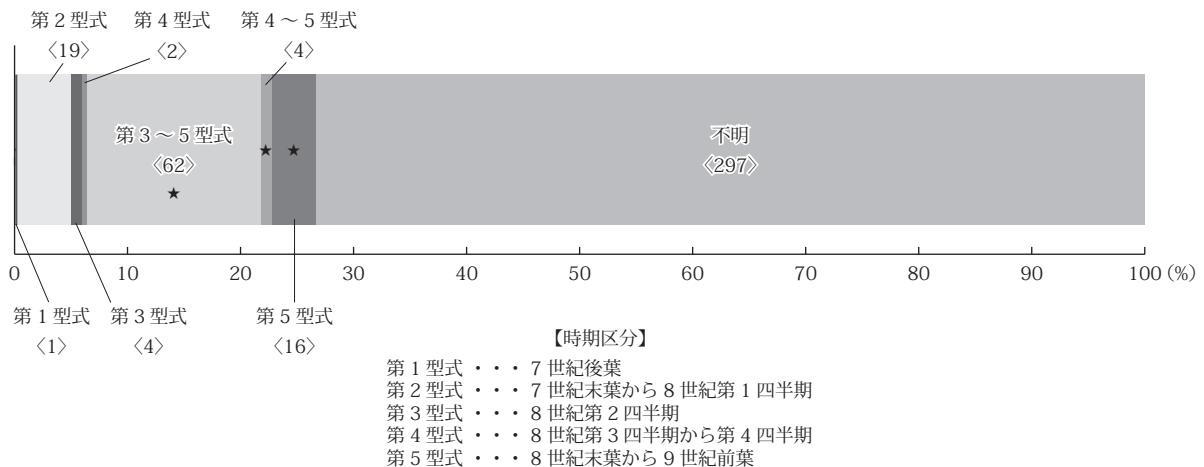
①種類別内訳



②須恵器器種別内訳



③型式別内訳



* ◇ 内の数値は出土点数を表している。★印は転用硯の出土を示す。

表2 出出土器集計表（破片数）-掲載遺物

種類	器種	器形			型式						破片数	備考	
		部位	属性	外傾指数	第1型式	第2型式	第3型式	第4型式	第5型式	不明			
須恵器	蓋	口縁端部	内側にかえりが付く		1						1		
			直立する屈曲口縁			1					1		
		つまみ	口縁端部がわずかに屈曲する						1		1		
			宝珠つまみ				1				1		
	高台付壺	体部	輪状つまみ		2						2		
			内湾する			1					1		
		高台	内湾する（直立気味の高台）			1					1		
			ハの字状又は直立気味の高台			1					1		
	無高台壺	口縁端部	底部外線に高台						3★		3	★内2点は転用硯	
			短く外側に屈曲				1				1		
		底部	口縁端部の屈曲が弱い					2★			2	★内1点は転用硯	
			回転糸切り後未調整				3				3		
土師器	壺 (高台の有無 は不明)	体部	外傾が強い	1.5～1.6 前後					3		3		
			体部から直線的に立ち上がる						1				
		口縁部	やや内湾する							1	1		
			やや内湾する				1			1	3		
	高台付皿	底部					2★				2	★内1点は転用硯	
	横瓶	胴部	外面：平行タタキ、カキ目 内面：同心円タタキ							2	2	7世紀～8世紀前半	
	平瓶	口縁部							1		1		
	壺	底部								1	1		
	甕	胴部	外面：平行タタキ 内面：同心円タタキ							6	6		
	灯明皿	底部	底部外面：回転糸切り後未調整						1		1		
合 計					1	6	0	0	10★		11	38	
合 計							6						
総合計								4★					
土師器	無高台壺	体部					1				1		
	高台付壺	底部				1					1		
	高台付皿	底部					1				1		
		口縁部								1	1		
	甕	把手								2	2		
	甕	頸部								1	1		
合 計					0	1	2			4	7		
総合計											45		

※ 破片のなかで第3～5型式いずれかの範疇におさまるものは、以下の網フセで示している。

第3～5型式・・・

第4～5型式・・・

★印は転用硯の出土を示す。

表3 出土土器集計表（破片数）-非掲載遺物

種類	器種	器形		型式						破片数	備考	
		部位	属性	第1型式	第2型式	第3型式	第4型式	第5型式	不明			
須恵器	蓋	口縁端部	直立する屈曲口縁		3					3		
			口縁端部がわずかに屈曲する				2	3		5		
		つまみ	輪状つまみ		3					3		
		不明							19	19		
	高台付壺	体部	内湾する		2					2		
			外面：回転糸切り後未調整				1			1		
		底部	ハの字状又は直立気味の高台		3					3		
			底部周縁のやや内側に低い高台			3				3		
	無高台壺	口縁端部	底部外縁に高台					3★		3	★内1点は転用硯	
			短く外側に屈曲		1					1		
		底部	口縁端部の屈曲が弱い			1				1		
			回転糸切り後未調整				6			6		
皿・横瓶	壺 (高台の有無は不明)	不明							2	2		
		口縁部	体部から直線的に立ち上がる				45			45		
		体部							6	6		
	皿(高台の有無は不明)	底部	回転糸切り後未調整				1★		6	7	★転用硯	
		口縁部					3			3		
		横瓶	口縁部	外反する短い口縁部		1				1		
	壺	胴部							29	29		
		底部							2	2		
	甕	胴部	外面：平行タタキ 内面：同心円タタキ						169	169		
	灯明皿								1	1		
	不明								46	46		
合 計				0	13	4	2	6★	286	367		
								56★				
土師器	高台付皿	底部					1			1		
		口縁部					1			1		
		高台					3			3		
	甕	口縁部							1	1		
		胴部							5	5		
		不明							3	3		
		不明							39	39		
合 計				0	0	5		48	53			
総合計									420			

※ 破片のなかで第3～5型式の範疇におさまるものは、網フセ [■] で示している。

★印は転用硯の出土を示す。

遺構一覧表

表4 掘立柱建物跡計測表

遺構名	規模(m)		主軸方向	柱間(m)		柱穴(m)		床面標高 (m)	出土遺物	出土位置	時期
	桁行	梁間		柱穴	間隔	上端径	深さ				
SB01	6.25 (5間)	1.2 (1間以上)	N - 61° - W	SP01 - 02	1.2	0.24 ~ 0.77	0.11 ~ 0.33	58.8	(須) 壊か長頸壺の口縁部 (須) 底部	SP06 床面直上	8C以降
				SP02 - 03	1.0						
				SP03 - 04	1.15						
				SP04 - 05	1.6						
				SP05 - 06	1.3						
				SP06 - 07	1.2						
SB02	3.2 (2間以上)	-	N - 58° - W	SP08 - 09	1.8	0.26 ~ 0.58	0.07 ~ 0.17	58.5	(須) 灯明皿型土器 (土) 襲の頸部	第9図7層 床面直上	8C末~9C前半
SB03	-	-	-	SP09 - 10	1.4						
SB04	1.9 (1間以上)	-	N - 68° - W	SP12 - 13	1.9	0.43 ~ 0.47	0.13 ~ 0.18	58.1	(須) 蓋(輪状つまみ) (須) 無高台壺底部	床面直上 溝埋土	8C末~9C前半
SB05	2.9 (2間以上)	1.15 (1間以上)	N - 62° - W	SP14 - 15	1.7	0.29 ~ 0.50	0.15 ~ 0.53	57.7	-	-	-
				SP15 - 16	1.2						
				SP16 - 17	1.15						
SB06	-	-	-	-	-	0.44	0.15	57.1	-	-	-
SB07	1.8 (1間以上)	-	N - 87° - E	SP21 - 22	1.8	0.56 ~ 0.60	0.11 ~ 0.19	58.1	-	-	-

表5 柱穴列計測表

遺構名	規模(長さ) (m)	方向	柱間(m)		柱穴(m)		床面標高 (m)	出土遺物	出土位置	時期			
			柱穴	間隔	上端径	深さ							
SA01	3.8 (2間)	N - 20° - W	SP23 - 24	1.8	0.27 ~ 0.40	0.08 ~ 0.17	60.0	(須) 蓋(擬宝珠つまみ) (須) 襲片	覆土 (明黄褐色土)	8C以降			
			SP24 - 25	2.0									
SA02	3.6 (2間)	N - 17° - W	SP26 - 27	1.5	0.60 ~ 0.80	0.23 ~ 0.30	60.1						
			SP27 - 28	2.1									
SA03	6.2 (3間)	N - 26° - W	SP29 - 30	2.1	0.52 ~ 0.64	0.24 ~ 0.37	59.5	-	-	-			
			SP30 - 31	2.4									
			SP31 - 32	1.7									
SA04	3.2 (2間)	N - 57° - W	SP33 - 34	1.6	0.58 ~ 0.97	0.24 ~ 0.32	59.2	-	-	-			
			SP34 - 35	1.6									
SA05	6.2 (3間)	N - 56° - W	SP36 - 37	4.1	0.36 ~ 0.44	0.11 ~ 0.20	59.4	-	-	-			
			SP37 - 38	2.1									

表6 遺構一覧表

遺構名	遺構番号		区	規模(m)			出土遺物	時期		
	新	旧		新	旧	直径・長さ	幅	深さ		
SB01	SB01	SP01	SP15	B	B	0.63	0.58	0.25	-	-
		SP02	SP84	B	B	0.24	0.20	0.11	-	-
		SP03	SP16	C	C	0.37	0.34	0.12	-	-
		SP04	SP83	C	C	0.46	0.37	0.17	-	-
		SP05	SP54	C	C	0.41	0.34	0.20	-	-
		SP06	SK05	C	C	0.77	0.71	0.33	(須) 壊か長頸壺の口縁部	出雲国府第3~5型式
SB02	SB02	SP07	SP51	C	C	0.33	0.28	0.13	-	-
		SP08	SP85	C	C	0.28	0.25	0.17	-	-
		SP09	SP78	C	C	0.58	0.48	0.13	-	-
SB03	SB03	SP10	SP82	C	B	0.26	0.22	0.07	-	-
		SP11	SP27	B	B	0.45	0.36	0.20	-	-
SB04	SB04	SP12	SP11	B	B	0.43	0.37	0.18	-	-
		SP13	SP18	B	B	0.47	0.25	0.13	-	-
SB05	SB05	SP14	SP10	B	B	0.43	0.31	0.15	-	-
		SP15	SP14	B	B	0.50	0.49	0.18	-	-
		SP16	SP23	B	B	0.29	0.25	0.53	-	-
		SP17	SP53	B	B	0.46	0.36	0.23	-	-
SB06	SB06	SP19	SP17	B	B	0.44	0.35	0.15	-	-
SB07	SB07	SP21	SP33	D	D	0.60	0.57	0.11	-	-
		SP22	SP62	D	D	(0.56)	(0.48)	0.19	-	-
SA01	柱穴列1	SP23	SP03	A	A	0.37	0.27	0.17	-	-
		SP24	SP04	A	A	(0.40)	(0.32)	0.14	-	-
		SP25	SP72	A	A	(0.27)	(0.11)	0.08	-	-

遺構名		遺構番号		区	規模(m)			出土遺物	時期	
新	旧	新	旧		直径・長さ	幅	深さ			
SA02	柱穴列 2	SP26	SP02	A	0.62	0.48	0.28	-	-	
		SP27	SP01	A	(0.80)	(0.72)	0.30	-	-	
		SP28	SP05	A	0.60	0.43	0.23	-	-	
SA03	柱穴列 3	SP29	SP67	A	0.62	0.48	0.26	-	-	
		SP30	SP68	A	0.56	0.48	0.26	-	-	
		SP31	SP69	A	0.64	0.48	0.24	-	-	
		SP32	SP70	B	0.52	0.45	0.37	-	-	
SA04	柱穴列 4	SP33	SP74	B	0.71	0.50	0.28	-	-	
		SP34	SP13	B	0.58	0.46	0.24	-	-	
		SP35	SP87	C	0.97	0.70	0.32	-	-	
SA05	-	SP36	SP12	B	0.41	0.30	0.20	-	-	
		SP37	SP48	C	0.44	0.39	0.16	-	-	
		SP38	SP60	C	0.36	0.30	0.11	-	-	
土 坑		SK01	SP06	C	(0.60)	(0.39)	0.26	(須) 裹片	-	
		SK02	SK10	C	0.81	0.53	0.34	(須) 壁の体部下半	-	
		SK03	SK02	B	(1.03)	(0.55)	0.25	(須) 壁の口縁部、裹片	出雲國府第5型式	
		SK04	SK08	C	(0.74)	(0.49)	0.32	-	-	
		SK05	SK09	C	(0.91)	(0.18)	0.29	-	-	
		SK06	SK06	C	0.88	0.74	0.33	-	-	
		SK07	SK04	C	0.85	0.66	0.25	-	-	
		SK08	SK11	D	(1.24)	(0.21)	0.21	-	-	
		SF01	SD01	C	(7.8)	(1.0 ~ 4.0)	0.18 ~ 0.25	(須) 裹片 (土) 高台付壁の底部	出雲國府第2型式	
柱 穴		SP18	SP20	B	0.36	0.29	0.18	-	-	
		SP20	SP32	D	0.54	0.52	0.20	-	-	
		SP39	SP35	C	0.55	0.39	0.15	-	-	
		SP40	SP56	C	0.56	0.62	0.27	-	-	
		SP41	SP31	C	0.49	0.41	0.18	-	-	
		SP42	SP50	C	0.72	0.30	0.14	-	-	
		SP43	SP43	C	0.30	0.25	0.18	-	-	
		SP44	SP42	C	0.30	0.25	0.08	-	-	
		SP45	SP47	C	0.35	0.32	0.11	-	-	
		SP46	SP44	C	0.56	0.40	0.23	-	-	
		SP47	SP75	C	0.92	0.52	0.19	-	-	
		SP48	SP36	C	0.38	0.29	0.18	-	-	
		SP49	SP30	C	(0.36)	(0.25)	0.22	-	-	
		SP50	SP28	C	1.14	0.89	0.50	-	-	
		SP51	SP79	C	0.65	0.56	0.21	-	-	
		SP52	SP29	C	0.51	0.49	0.30	-	-	
		SP53	SP57	C	0.46	0.44	0.21	-	-	
		SP54	SP52	C	0.32	0.24	0.12	-	-	
		SP55	SP61	C	0.67	0.51	0.32	-	-	
		SP56	SP71	C	0.42	0.36	0.22	-	-	
		SP57	SP24	B	0.21	0.21	0.09	-	-	
		SP58	SP19	B	0.40	0.35	0.19	-	-	
		SP59	SP08	B	0.42	0.36	0.19	-	-	
		SP60	SP09	B	0.37	0.30	0.12	-	-	
		SP61	SP26	B	0.51	0.48	0.24	-	-	
		SP62	SP07	B	0.59	0.58	0.40	-	-	
		SP63	SP25	B	0.38	0.30	0.18	-	-	
		SP64	SP21	B	(0.60)	(0.29)	0.20	-	-	
		SP65	SP87	B	0.32	0.28	0.16	-	-	
		SP66	SP22	B	0.40	0.28	0.18	-	-	
		SP67	SP58	C	0.77	0.64	0.25	-	-	
		SP68	SP64	C	0.31	0.24	0.16	-	-	
		SP69	SP65	C	0.19	0.13	0.07	-	-	
		SP70	SP49	C	0.42	0.35	0.29	-	-	
		SP71	SP66	C	0.25	0.23	0.13	-	-	
		SP72	SP55	C	0.26	0.19	0.18	-	-	
		SP73	SP40	C	0.43	0.40	0.16	-	-	
		SP74	SP37	C	0.46	0.34	0.22	-	-	
		SP75	SP38	C	0.29	0.27	0.10	-	-	
		SP76	SK07	D	0.59	0.58	0.22	-	-	
		SP77	SP34	D	0.76	0.59	0.19	-	-	
		SP78	SP39	D	0.31	0.23	0.19	-	-	
		SP79	SP88	D	(0.26)	(0.10)	0.07	-	-	

* 出土遺物欄の(須) = 須恵器、(土) = 土師器

土 器

遺物番号	区	遺構名	出土位置 出土土層	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	備考
						口径	底径	器高			
3-1		T-1	SB01 溝	須恵器	壺の口縁部	-	-	1.7	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	
3-2		T-1	SP51	須恵器	甕	-	-	3.9	外 平行タタキ 内 同心円タタキ	外 灰色 内 灰色	
12-1	C	SB01	SP06	須恵器	壺または長頸壺の口縁部	7.5	-	2.1	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色(釉がかかる) 内 灰色	出雲國府第3~5型式
12-2	C	SB01	床面直上	須恵器	底部	-	-	0.7	外 回転糸切り 内 静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第3型式以降
14-1	C	SB02	床面直上	須恵器	灯明皿型土器	-	6.0	1.8	外 回転ナデ、回転糸切り後未調整 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	8世紀末~9世紀前半
14-2	C	SB02	床面直上	土師器	甕の頸部	-	-	3.2	外 風化 内 風化	外 黄橙色 内 黄橙色	
17-1	B	SB04	床面直上	須恵器	蓋	14.0	-	1.3	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	輪状つまみが付くもの 出雲國府第2型式
17-2	B	SB04	溝埋土	須恵器	無高台壺	-	6.1	1.3	外 回転糸切り 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第3~5型式か
21-1	A	SA01・02	覆土	須恵器	宝珠つまみ	-	1.8 つまみ径	1.5	外 回転ナデ 内 静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第3~5型式
21-2	A	SA01・02	覆土	須恵器	甕片	-	-	6.2	外 平行タタキ 内 同心円タタキ	外 灰色 内 灰色	
23-1	C	SK01	埋土	須恵器	甕片	-	-	4.5	外 平行タタキ 内 同心円タタキ	外 灰色 内 灰色	
25-1	C	SK02	埋土	須恵器	壺の体部下半	-	-	2.4	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	
27-1	B	SK03	埋土	須恵器	壺の口縁部	14.6	-	2.2	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第5型式 (8C末葉~9C前葉)
27-2	B	SK03	埋土	須恵器	甕片	-	-	5.8	外 平行タタキ 内 同心円タタキ	外 灰白色 内 灰白色	
29-1	C	SF01	埋土	須恵器	甕片	-	-	6.1	外 平行タタキ 内 同心円タタキ	外 灰色 内 灰色	
29-2	C	SF01	埋土	土師器	高台付壺の底部	-	10.5	2.0	外 回転ナデ、回転糸切り 内 回転ナデ	外 橙色 内 橙色	出雲國府第2型式
30-1	C		2層 明黄褐色土	須恵器	蓋	11.4	-	1.1	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第1型式(7C後葉)
30-2	B		2層 明黄褐色土	須恵器	輪状つまみの蓋	-	5.0 つまみ径	1.0	外 回転ナデ、回転ヘラ削り 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第2型式
30-3	A		2層 明黄褐色土	須恵器	輪状つまみの蓋	15.3	5.3 つまみ径	2.7	外 静止ナデ、回転ナデ、 回転ヘラ削り後ナデ 内 回転ナデ、静止ナデ	外 灰色(釉がかかる) 内 暗灰色	出雲國府第2型式 「○」印が外面にみられる 30-6とセット
30-4	C		2層 明黄褐色土	須恵器	蓋	13.4	-	2.1	外 回転ヘラ削り、回転ナデ 内 回転ナデ、静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第5型式
30-5	C		2層 明黄褐色土	須恵器	高台付壺の口縁部	12.4	-	3.0	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 釉がかかる 内 釉がかかる	出雲國府第2型式か
30-6	A		2層 明黄褐色土	須恵器	高台付壺	13.7	8.7	5.0	外 回転ナデ、回転糸切り後ナデ 内 回転ナデ、静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第2型式 「○」印が底部外面にみられる 30-3とセット
30-7	C		2層 明黄褐色土	須恵器	高台付壺	-	7.6	3.1	外 回転ナデ、静止糸切り後ナデ 内 回転ナデ、静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第2型式
30-8	B		2層 明黄褐色土	須恵器	高台付壺の底部	-	8.8	2.4	外 回転ナデ、回転糸切り 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲國府第5型式

遺物番号	区	遺構名	出土位置 出土土層	種類	器種	法量(cm)			調整・手法の特徴	色調	備考
						口径	底径	器高			
30-9	C		2層 明黄褐色土	須恵器	高台付坏	-	9.2	4.9	外回転ナデ、回転糸切り後未調整 内回転ナデ、回転ナデ後静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第5型式 転用鏡
30-10	C		2層 明黄褐色土	須恵器	高台付坏	17.2	10.0	6.9	外回転ナデ、回転糸切り後未調整 内回転ナデ、静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第5型式 転用鏡
30-11	A		2層 明黄褐色土	須恵器	無高台坏の 口縁部	12.5	-	2.8	外回転ナデ 内回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第3~5型式
30-12	A		表土	須恵器	無高台坏の 底部	-	8.4	2.8	外回転ナデ、回転糸切り後未調整 内回転ナデ、静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第3~5型式
30-13	A		表土	須恵器	無高台坏	12.7	8.6	4.0	外回転ナデ、回転糸切り後未調整 内回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第4~5型式
30-14	B		2層 明黄褐色土	須恵器	無高台坏	12.4	8.6	4.2	外回転ナデ、回転糸切り後未調整 内回転ナデ後静止ナデ、回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第4~5型式 転用鏡
30-15	C		2層 明黄褐色土	須恵器	無高台坏	-	7.4	3.3	外回転ナデ、回転糸切りか 内回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第5型式
30-16	C		2層 明黄褐色土	須恵器	無高台坏	11.4	7.4	4.8	外回転ナデ 内回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第5型式
30-17	C		2層 明黄褐色土	須恵器	無高台坏	11.5	7.1	4.1	外回転ナデ、回転糸切り 内回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第5型式
30-18	A		表土	須恵器	高台付皿	-	14.6	1.3	外回転ナデ、回転糸切り後未調整 内回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第4~5型式 転用鏡
30-19	A		2層 明黄褐色土	須恵器	高台付皿	-	14.0	1.3	外回転ナデ、回転糸切り後未調整 内回転ナデ、静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第4~5型式
30-20	A		2層 明黄褐色土	須恵器	平瓶	10.0	-	2.1	外回転ナデ 内回転ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第5型式
30-21	A		2層 明黄褐色土	須恵器	壺の底部	-	6.0	2.7	外回転ナデ、回転糸切り、工具痕 内回転ナデ、静止ナデ	外 灰色 内 灰色	出雲国府第4型式以降
31-1	C		2層 明黄褐色土	須恵器	横瓶	-	-	6.3	外平行タタキ 内同心円タタキ	外 灰色 内 灰色	
31-2	C		2層 明黄褐色土	須恵器	横瓶	-	-	10.0	外平行タタキ後力牛目 内同心円タタキ	外 灰色 内 灰色	
31-3	C		2層 明黄褐色土	須恵器	甕	-	-	6.3	外平行タタキ 内同心円タタキ	外 灰色 内 灰色	
31-4	C		2層 明黄褐色土	土師器	高台付皿の 口縁部	-	-	2.6	外回転ナデ 内回転ナデ	外 橙色 内 橙色	
31-5	C		2層 明黄褐色土	土師器	高台付皿の 底部	-	12.6	1.4	外回転ナデ、回転糸切りか 内回転ナデ	外 橙色 内 橙色	出雲国府第3~5型式
31-6	C		2層 明黄褐色土	土師器	無高台坏	-	11.1	2.4	外風化 内風化	外 橙色 内 淡橙色	出雲国府第3~5型式か
31-7	A		表土	土師器	甕の把手	-	3.3 断面径	4.7 把手長	風化	淡橙色	
31-8	C		2層 明黄褐色土	土師器	甕の把手		3.1 断面径	4.2 把手長	風化	橙色	

【註】

- (1) 山城とする根拠に乏しいとのご意見を、元松江市文化財課史料編纂室、山根正明氏より頂いた。
- (2) 川原和人 2010 「出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』島根県古代文化センターを参考にした。そのなかで川原氏は、灯明皿型土器を口縁部近くが大きく「く」の字に屈曲するもの（A タイプ）と、底部から口縁部にかけて緩やかに外反するもの（B タイプ）に分け、また、それを 3 段階の時期に分けている。第 14 図-1 は、その B タイプのⅢ段階を基準としている東出雲町の林廻り遺跡 SB01 出土の灯明皿と形が似ており、Ⅲ段階の年代、8 世紀末から 9 世紀初頭と判断した。
- (3) 本報告では、壺の内面が滑らかなものを転用硯として記載している。但し、見込みが深いこうした壺を転用硯としたもののなかには、長期に渡る使用（内面の洗浄）により滑らかとなったものもあるのかもしれない。
- (4) 島根県教育委員会 1984 『高広遺跡発掘調査報告書』
- (5) 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1996 『四ツ廻Ⅱ遺跡 林廻り遺跡 受馬遺跡』
- (6) 島根県教育委員会 1989 『第 3 節 古曾志平廻田遺跡』『古曾志遺跡群発掘調査報告書』
- (7) 日本道路公団中国支社・島根県教育委員会 2002 『堤平遺跡』
- (8) 堤平遺跡では、鉄鉢形土器や灯明皿型土器、ヘラ書き土器や墨書き土器などの文字資料、青銅製の容器片が出土し、仏教関係遺跡と考えられている。
- (9) 林健亮 2000 「灯明皿型土器から見た仏教関係遺跡」『出雲古代史研究』（第 10 号）のなかで林氏は、灯明皿型土器は仏教に深く関わる可能性が高い土器としておられる。
- (10) 一般的に「集落遺跡」と言われる遺跡から出土した遺物との比較は行っていないが、調査指導時に指導者の意見として挙がった。今後、こうした遺跡間での数量比較が課題として挙げられる。
- (11) 花谷浩氏（出雲市 市民文化部 文化財課）の御教示による。

写 真 図 版



調査前全景（南東から）



中央畦土層断面（北西から）

図版 2



完掘状況（南西から）



完掘状況（南東から）



完掘状況（北西から）



SF01・SK02 完掘状況（南東から）

図版 4



SF01 土層断面
(南から)



SK01 完掘状況
(南から)



SK03 碓検出状況
(南西から)

SK03 完掘状況
(南西から)



遺物出土状況

(蓋)

* 第 30 図 -3



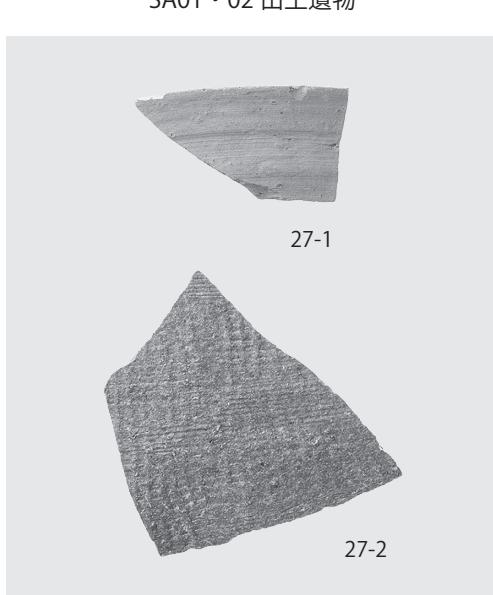
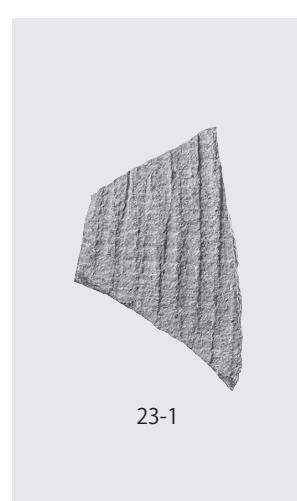
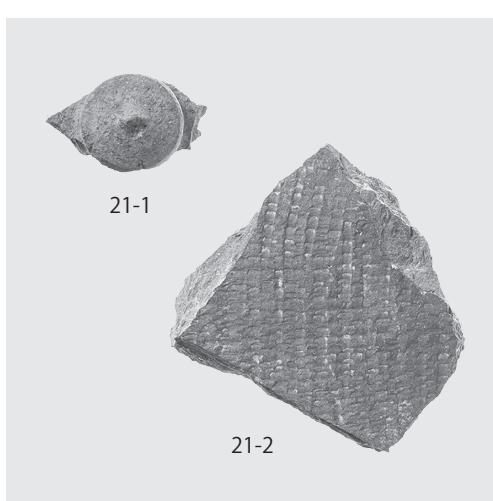
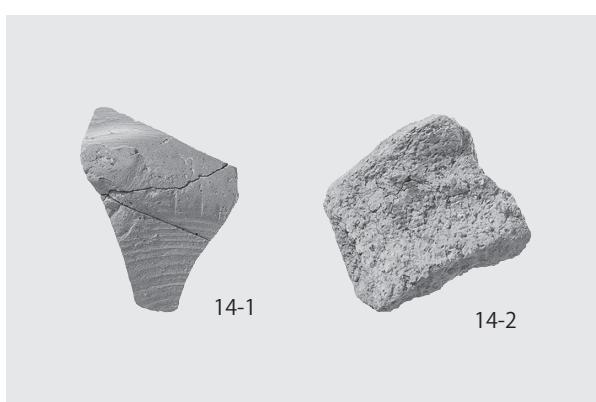
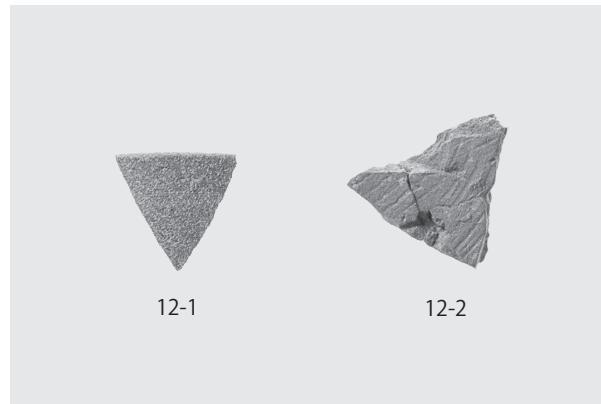
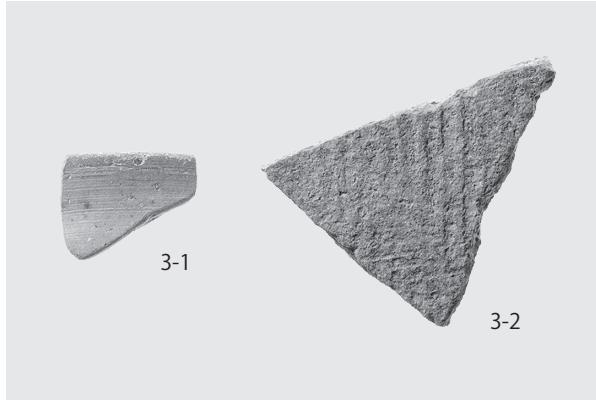
遺物出土状況

(高台付壺)

* 第 30 図 -6



図版 6





* 30-3…天井部に「○」印



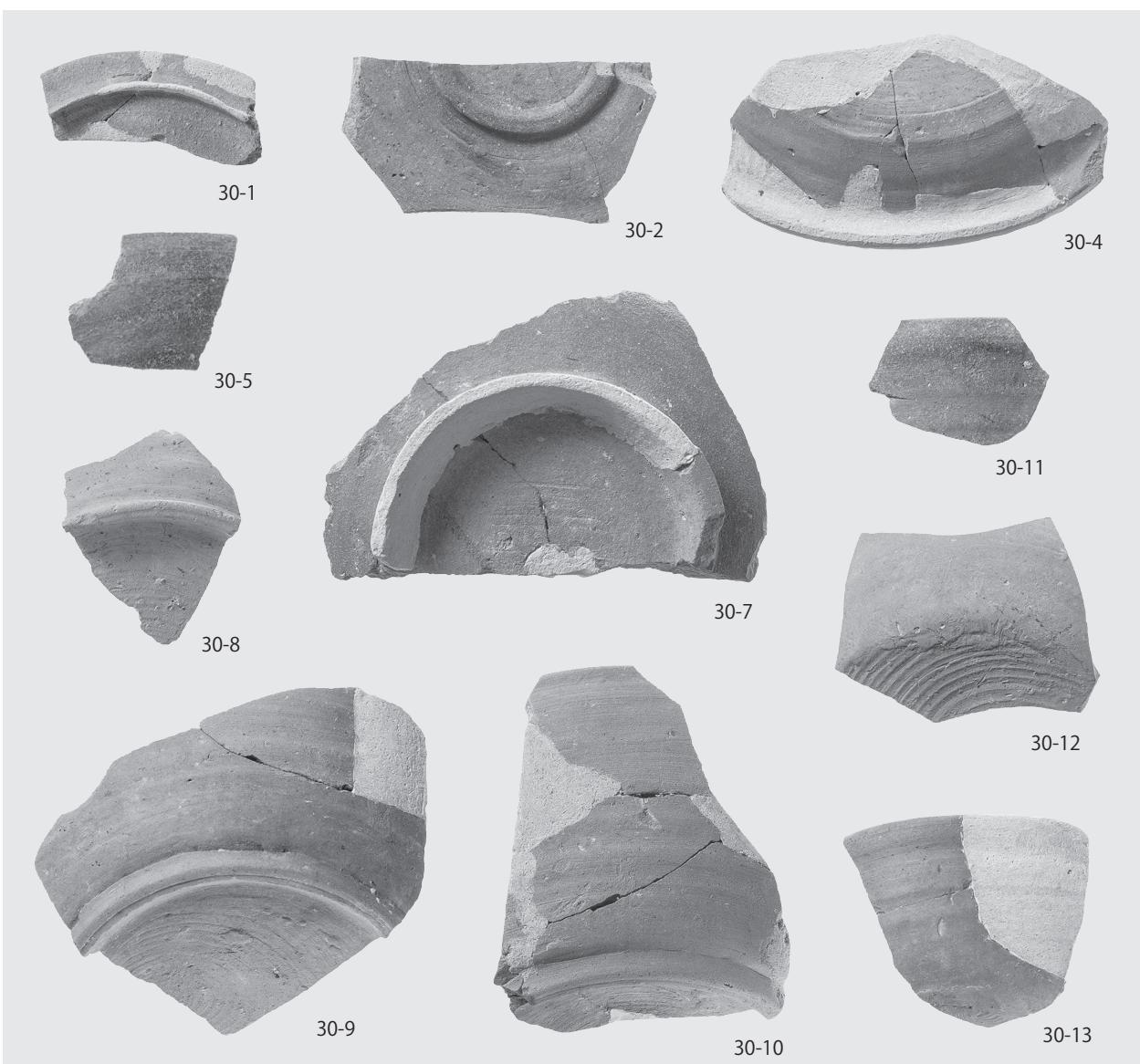
30-3



* 30-6…底部に「○」印

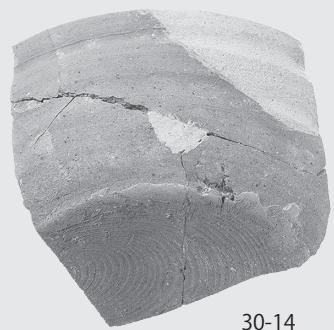


30-6



遺構外出土遺物①

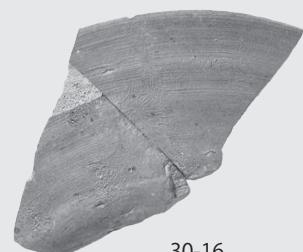
図版 8



30-14



30-15



30-16



30-17



30-18



30-19



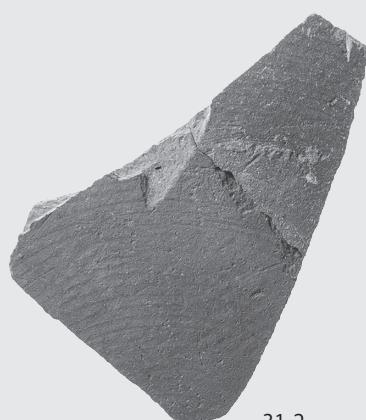
31-1



30-20



30-21



31-2



31-3

(須恵器)



31-4



31-5



31-6



31-7



31-8

(土師器)

遺構外出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	かみおかいせき						
書名	上岡遺跡						
副書名	交通安全施設整備事業（市道大野上岡線視距改良工事）に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第175集						
編著者名	廣濱貴子 徳永隆						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	2016年6月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
かみおかいせき 上岡遺跡	しまねけんまつえし 島根県松江市 岡本町 1281番地1	32201	D-1143	35° 29' 28" 132° 56' 39"	20150212 ～ 20150410	171.1m ²	交通安全施設整備事業(市道大野上岡線視距改良工事)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上岡遺跡	集落跡	奈良～平安時代	掘立柱建物跡 柱穴列 土坑 通路	須恵器 土師器	掘立柱建物跡7棟、柱穴列、土坑、通路を検出し、出土遺物より7世紀末から9世紀前葉頃の建物跡と考えられる。		

松江市文化財調査報告書 第175集
交通安全施設整備事業(市道大野上岡線視距改良工事)に
伴う発掘調査報告書

上 岡 遺 跡

平成28(2016)年 6月

発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印刷 (株)谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59
